

『人間文化』 vol. 15

人間文化研究機構 第16回公開講演会・シンポジウム

「アジアから琉球弧を考える ―海洋をめぐる人・モノ、文化―」

日時：平成23年9月23日（金）12:30～16:30

場所：大阪歴史博物館 講堂

主催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

共催：大阪歴史博物館

後援：文部科学省、法政大学沖縄文化研究所、国際琉球・沖縄学会

目次

開会のあいさつ

[金田章裕](#)（人間文化研究機構長）

第1部 講演と報告

[問題提起／映像上映「西表島の稲作儀礼」](#)

解説：松尾恒一（国立歴史民俗博物館教授）

[基調講演「奄美の宇宙―昭和30年代の民俗調査から」](#)

ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

[報告1「近世琉球の生業と島産品」](#) 得能壽美（法政大学沖縄文化研究所兼任所員）

[報告2「八重山諸島の先史時代」](#) 島袋綾野（沖縄考古学会会員）

第2部 コメントと討論

[コメント1：小熊 誠](#)（神奈川大学教授）

[コメント2：真栄平房昭](#)（神戸女学院大学教授）

[総合討論](#)

司 会：上野祥史（国立歴史民俗博物館准教授）

パネラー：ヨーゼフ・クライナー、得能壽美、島袋綾野、小熊 誠、

真栄平房昭、松尾恒一

閉会のあいさつ

[平川 南](#)（国立歴史民俗博物館長）

あいさつ

金田 章裕（人間文化研究機構長）

本日は人間文化研究機構第16回の公開講演会・シンポジウムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。

人間文化研究機構は、国立大学法人化と同時に設立された大学共同利用機関法人です。大阪にある国立民族学博物館といえば、大阪にいる人には身近な存在だと思いますが、そのほか京都府の国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、それから関東の国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所という六つの国立の研究機関が構成している法人です。研究機関毎の研究に加え、研究機関が相互に連携した研究を進めています。また、日本各地の大学や海外の研究機関も含めた、幅広い研究活動を展開しています。その成果をこういった形でご報告し、皆さまと一緒に考えてみたいという目的で公開講演会・シンポジウムを開催しているわけです。

本日のテーマは「アジアから琉球弧を考える ―海洋をめぐる人・モノ、文化―」です。今回のシンポジウムは国立歴史民俗博物館を中心として企画し、大阪歴史博物館の共催を得て開催しております。さらに法政大学沖縄文化研究所ならびに国際琉球・沖縄学会のご後援も得ています。

琉球弧というのは、ご承知のように九州の南端から台湾にかけて続く島嶼列です。この島嶼列は相対的に大陸や東南アジアに近いということと、黒潮という巨大な海流が存在することもありまして、その歴史は本土とはかなり異なった特徴を有することが知られています。九州に近い奄美地方、あるいは政治の中心となった沖縄本島やその周辺、そして一番南側の八重山地方という形で、それぞれ非常に色濃い地域性を有していたということも知られているわけです。

近年ではこのような琉球弧のいろいろな側面について、より広い視点から、海外においても研究が強まっております。この公開講演会・シンポジウムでは、考古学・歴史学・民俗学の先端の研究者の報告と討議によりまして、黒潮の流れる海洋を視野に入れ、アジアの視点から琉球弧を考えるということを企図しております。研究史の流れや新たな事実や見方についての報告を基にして、あらためて琉球弧について考えをめぐらせていただくのが目的です。

大阪には、沖縄出身の方々もたくさんお住まいであると聞き及んでおります。そういった方々も含めて、広くお考えいただくことをご期待申し上げて、本日のごあいさつに代えさせていただきますと思います。

問題提起／映像上映「西表島の稲作儀礼」

解説：松尾 恒一（国立歴史民俗博物館 民俗研究系 教授）

まず、今回の企画に至った経緯についてお話をしたいと思います。

国立歴史民俗博物館は千葉県の佐倉市にありますが、1983(昭和 58)年に開館しました。その設立趣旨は博物館名にはっきり表れているように、日本の歴史と文化を考えていくということを第一の大きな目的としております。日本の歴史の中でも民衆の歴史と文化を、民衆の生活を中心に考え、研究していくということが設立以来の本館の変わらない大方針です。

日本の歴史と文化を考えていく方法として、いろいろな学問分野があります。細かく分けていけばきりがありますが、まずは歴史ですから、何年何月何日に書かれたということがはっきりしている文字資料、文献資料からそれぞれの時代を考究する歴史学があります。

それから埋蔵文化、地面の下から発掘、発見されたモノ資料を主として考えていくのが考古学です。

さらにもう一つ、資料という認識は一般の方々にはもたれないと思いますが、まさに現在われわれが行っている生活そのものから考えていく、主に民俗学という学問分野で行われている研究です。

歴博では、現在、研究部のなかに歴史・考古・民俗といった系がありますが、その3分野が協業しあって研究を進め、日本の歴史と文化を追求していこうという趣旨で作られたのが歴博です。

その名称の通り、博物館を持っていることが歴博の特徴でもあります。展示施設を持って、小学生、中学生から、大学・大学院生、大学に所属する研究者、それから、おじいさんおばあさんまで、年齢層も関心もさまざまな来館者がいらっしゃいます。そういう多様な来館者に対応し、先端の研究を見せていく、あるいは見てもらって理解していただくだけでなく、考えてもらうというところに、歴博の活動の力点を置いています。

最初に申しあげましたとおり、歴博が 1983 年に開館されて 20 年がすぎ、間もなく 30 年を迎えようとしています。この間に大きく歴史研究も進展しています。日本の歴史を日本の歴史の中で単独で考えていこうという姿勢や、日本の中の資料を使うという研究も

その重要性は変わっておりませんが、現在、さらにグローバルな視点から考究することが求められてきています。

たとえば、鎖国をしていて閉ざされていたとイメージされがちな近世、江戸時代においても、国際的な交流は継続され、情報や物を収集する活動が積極的に行われていたことが知られてきて、そうした歴史の重要性が認識されるようになってきています。

現在、インターネットに象徴されるように、情報が瞬時に、しかもグローバルな世界のなかで行き交うような情報社会が実現するようになりましたが、そうした状況下で、従来にも増して、日本の外側にも関心を向けざるを得ないような社会となりました。人文研究には、このような社会の要請に応えなくてゆくことが求められています。

こうした状況のなかで、歴博では、新たに常設展のリニューアルが開始されました。この5年間に近世を扱った第3展示室がリニューアルオープンし、また新たに開設された現代展示においては沖縄が重視され、また、日本から外国にわたり定住した移民などに焦点も当てられて、今までとは異なる、日本列島の中だけで収まらないような日本の歴史像が提示されています。この2つの展示に続いてリニューアルの計画が進んでいるのが、私の所属する民俗展示室です。

このほかの関連の展示としては、直近では、本日総合司会を務めます考古学研究系の上野祥史さんが企画した「アジアの境界を越えて」で、アジア世界の中で日本列島をとらえ直していくといった趣旨の展示を、国立民俗学博物館とともに主催しました（2010年人間文化研究機構連携展示）。

本日の公開講演会・シンポジウムの趣旨も、アジア世界の中で日本列島を捉え直すという視点で、歴史・考古・民俗のそれぞれの視点より、琉球地域の文化や歴史の特徴を考えていくというものです。

1. 琉球への龍船競争の伝来と諸島嶼への伝播

これからお話しするのは琉球地域の南方にある、石垣島・西表島・黒島・小浜島等からなる八重山地域についてです。

「西表島の稲作儀礼と龍船競争」というタイトルでお話をしますが、この龍船競争は、中国との交流によってもたらされた行事です。この行事は現在、八重山地域を含む沖縄全域で盛んにおこなわれている人気も高い民俗行事です。この行事が中国より沖縄に伝わっ

たのは1400年頃で、その後、宮古島や八重山地方など、琉球域内の地方に広まっていったと考えられます。

その地方に伝わった龍船競争ですが、中国より沖縄に伝播した当初のかたちそのままではなく、地域的な特色をもって変化し、現在に伝承されたようです。

まず、現在の中国における「龍船」がどのような船なのかを見てみたいと思います。[図1（9ページ参照）](#)の写真は台湾における龍船の一例ですが、現在の中国の典型的な龍船でもあります。右側の先頭の方に龍の頭が付いているのが大きな特徴で、船体には鱗が描かれ、船全体で龍を表現しています。このように文字通り龍をかたどった船が龍船です。

日本での表記では「船」を使うことが多いのですが、中国の文献では、また、現在においても「龍舟」と表記し「long-zhou（ロンジョウ）」と発音されています。いずれにしてもこの龍船競争は現在の沖縄地域、沖縄本島から宮古・八重山に至る多くの地域で行われていて、とても人気もあり、現代のイベント的な要素もある民俗行事です。

この琉球域の龍船競争が、どのようにしてこれが始められたかということを、文献によって確認することができます。琉球の正史『球陽』の中にその記述が見られ、三つの説が書かれていますが、いずれにしても大きな共通点を持っています。それは、中国の福建地方から伝わったということです。

当時、中国との貿易が盛んに行われていました。冊封体制の中で朝貢をたてまえとする「進貢貿易」と呼ばれる貿易でした。滋賀大学経済学部附属史料館蔵『琉球貿易図屏風』（図2）には、琉球時代的那覇港に出入りしたさまざまな船舶の様子を見ることができます。前方の側面に大きな目が描かれた特徴ある船は「進貢船」と呼ばれた船です。当時、この進貢船によって大きな交易が繰り広げられていました。

また、大和島津藩の船も見られますが、また、これからお話しする龍船競争の、龍の頭の付いた龍船の姿も見ることができ、近世期の龍船のかたちを、この貿易図から窺うことができます。

琉球の貿易圏は、大和や東南アジアまで広がっていましたが、中国との交易が行われる中で、龍船競争という文化が中国から入ってきたことが、はっきりと『球陽』の中に記されています。その記録より、琉球では、王府の置かれた、那覇、首里の地方を中心に行われ始めたことが知られます。

その起源となった中国の龍舟競渡ですが、中国では端午の行事として行われ、現在でも、主として南方の多くの地域で行われています。

端午の行事という、日本では子ども、特に男の子の成長を願う行事として、柏餅や粽^{ちまき}を作って鍾馗様に供えて食べたり、屋根に菖蒲を上げたりといった行事を多くの地域で見ることができますが、こうした行事のいくつかは、中国の現在の端午の行事においても行われています。

一方、日本には見られず、中国では端午の行事として盛んにおこなわれているのが龍舟競渡ですが、沖縄地方では、この中国の端午の行事としての龍舟競渡が伝えられ、現在でも行われているのです。

龍船は琉球域では、「ハーリー船」という呼び名が一般的ですが、「ハーリー」とは、「爬龍」の音読みです。その龍船競争は、沖縄本島を中心とする多くの地域では、旧暦五月四日の「ユカヌヒー（四日の日）」と呼ばれる行事として行われています。

五月五日、端午の前日ですが、「ユカヌヒー」にも、またその龍船競争にも、少なくとも現在の沖縄の人々には、端午の行事としての意識、認識はないようです。先に述べましたように、その伝来元の中国では、旧暦五月五日に端午の行事として行われています。なぜ、琉球域において、このように受容され、定着したのかは、さらなる調査や研究が必要でしょう。

2. 人重山地方の稲作儀礼と龍船競争

沖縄では、本島のさらに南方、台湾に近い宮古島から石垣・西表等の八重山、与那国などで、「ユカヌヒー」以外の行事における龍船競争の例が見られます。

稲作をはじめとする農耕と深くかかわった「豊年祭」、あるいは「節祭^{シチ}」と呼ばれる行事における龍船競争です。

本土において、お正月にいただく料理のことを「お節料理^{せち}」と呼んだりしますが、「節^{しち}」はこの「せち」に近い発音です。節祭は、旧暦の九月に行われますが、文字通り、一年の大きな節目、正月を意味する言葉で、その年の稲の稔りの感謝と、新しい年の豊穰の祈願をすることが大きな目的です。また、現在の暦では六月中にはほぼ収穫を終え、七月に行われる豊年祭は、稲をはじめとする五穀の稔り、収穫が豊かであったことを感謝する祭りとして行われます。

「ユカヌヒー」の龍船競争は、海神への航海安全や豊漁祈願の行事として行われる例が多くみられますが、宮古・八重山・与那国では、「豊年祭」や「節祭^{シチ}」において、このよ

うに農耕と関わる行事に変容して、定着しているのです。

なお、現在でも、沖縄地域でも中国・台湾でも、龍船競争は人気のある民俗行事として、盛んに行われ、その信仰的な意味合いも濃厚に伝えられていますが、学校や地域、会社などのグループで出場して船の速さを競いあう競技的な側面を強め、観光客も訪れるイベント的な行事となっている例も少なくないようです。

本土においても端午や七夕、十五夜など中国を起源として民間行事として現在に傳承される行事は少なくありませんが、琉球地域の傳承文化は、本土とは異なる歴史のなかで、中国からの影響を受け、現在に続いていること、その特質の解明のうえで、日本列島のなかでの地域性を追求するばかりでなく、東アジアからの視点で考えてゆく必要性があることの一例として、龍船競争の行事についてお話ししました。

そうした実際の様子として、次に西表島の二つの集落、祖納そないと干立ほしたてにおける龍船競争を含む節祭の映像をご覧くださいと思います。2013年3月に予定されている民俗新展示のために、私（松尾）が担当して制作した各11min.の映像作品ですが、特に祖納編では、稲の初穂を刈る祝いの行事から、豊年祭・節祭を経て、翌年の田植えを行う、1年の稲作に関する主要な行事も紹介しました。

映像「西表島の稲作儀礼」上映

西表島の龍船競争が、海の彼方にあると信仰される異郷“ニライカナイ”から新しい豊かな年をお迎えするといった、海洋の琉球地域に特有な神觀念と結びついて現在に続いていることが感じられたかと思います。

また、本土における神社に相当する御嶽うたき/うがんと呼ばれる森のなかの聖所での祈願が、女性の宗教者——今ご覧いただいた西表の例ではツカサと呼ばれる女性宗教者——によって行われる点も、本土には見られない民俗的な特色です。この女性宗教者の問題については、特にクライナー先生が奄美の事例を中心にお話をしてくださる予定です。

前近代、琉球王国では、聞得大君きこえおおきみと呼ばれる、琉球王の姉妹に当たる女性が国家的な祭祀を行っておりました。琉球域では、姉妹が男兄弟や家の守り神になるといった「姉妹神」の信仰があり、こうした信仰に基づく祭祀が現在なお、村落や家において続いているのですが、こうした祭祀はまた、本土とも中国とも異なる琉球独自の民俗文化だとも考えられています。

日本のなかでの琉球域の文化の特質の解明のために、日本列島の中で相対化するばかりでなく、本土とは異なる交流の歴史を有するアジアからの視点が必要なのです。

〔付記〕本公開講演会・シンポジウムにおいて上映しました映像「西表島の稲作儀礼」は、国立歴史民俗博物館・松尾恒一編『琉球弧 海洋をめぐるモノ・人、文化』（歴博フォーラム「民俗展示の新構築」シリーズ、岩田書院、2012年3月）の付録DVDにより、ご覧いただくことができます。



図1 「台南運河の龍舟競渡」（著者撮影）[\(本文へ\)](#)

都合により掲載は控えております。ご了承ください。

図2 「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）[\(本文へ\)](#)

基調講演「奄美の宇宙—昭和 30 年代の民俗調査から」

ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

1. 研究の背景

奄美の宇宙というお話をする前に、どうしてヨーロッパの真ん中のウィーンという町に生まれ育った私が、今から 50 年ほど前に文部省留学生として日本に来て、間もなく奄美に渡って、その歴史・民俗、あるいは文化を研究してきたのかを少し説明しなければならぬと思っています。

まず大正 10 年まで話をさかのぼらなければなりません。日本のフォークロア研究、民俗学の設立の親と言ってもいいと思いますが、柳田国男先生は昭和 9 年から 10 年にかけて九州から南西諸島を旅行されたのです。ちょうど大正 10 年の元旦に鹿児島で船に乗って奄美に寄りましたが、主に沖縄の島を回って調査研究をされました。そして、帰りにもう一ぺん奄美に寄りました。目的は、当時、伊波普猷先生が奄美大島に講演旅行をされたのですが、伊波普猷に会って、ぜひとも東京に出るように勧めたいと柳田先生は考えたのです。そして瀬戸内町の古仁屋という町から加計呂麻島に渡って、しばらくそこで調査をされました。

柳田先生は、その旅から内地に戻って間もなくスイスのジュネーブにあった国際連盟の日本代表部で仕事をするようになりましたが、大正末期に東京に戻って談話会を組織します。その談話会に参加したメンバーの方々の名前を今から考えてみますと、日本の民俗学、あるいは考古学、宗教研究の第一人者の先生方ばかりです。伊波普猷先生はもちろん、宗教学の立場から沖縄のことを考えた折口信夫先生などもいらっしゃいました。中山太郎や早川孝太郎先生、そして一番若くて使い走りのようにその研究会の世話役をしていたのが岡正雄先生です。

岡正雄先生は、その談話会で発表された折口先生の講演に非常に深い感銘を受けました。神々が毎年、時を決めて海の向こうから人間の世を訪ねてくる、その来訪を村の青年の若者が仮面や仮装でもって表現する、すなわちそれが日本の演劇の始まりだという折口先生のお考えをもっと広げて、社会学の立場から、例えば商業、日本の市場の始まりはそこにあるのではないかと岡先生は考えて、自ら「異人その他」という論文を雑誌『民族』に出しました。そのとき折口先生の論文はまだ発表されていなかったもので、岡先生は折口先生

に対して非常に責任を感じて、どうしても折口先生の論文を発表したいと、柳田先生の反対を押し切って折口先生の手稿を雑誌に出したのです。それで柳田先生に怒られて、岡先生の言葉を使うと破門されたわけです。

そして日本にいられなくなって、渋谷敬三先生から奨学金をもらって、どこでもいいのですけれども、エスノロジーという民族学、今は文化人類学と言っているのですが、そういう日本にはまだない学問を身に付けてこいと言われて、岡先生はウィーン大学に行ったのです。ウィーン大学に 8 年間留学して、最初は論文を出すつもりではなかったのですが、ウィーンの当時の雰囲気によって、とうとう昭和 8 年に博士論文として『古代日本の文化層』という、いまだにウィーン大学で出された最もページ数の多い 1500 ページぐらいの博士論文を出したのです。

私は昭和 33 年にウィーン大学に入って、1 年生のときに指導教官に図書室の本棚の前に連れていかれて、岡先生の 3 冊に分けたタイプライターの原稿が黒い表紙で製本された論文を指差して、「これにはあなたの博士論文のテーマが幾つも入っているから、これから読みなさい」と言われました。それで私は岡先生を通じて柳田先生の『海南小記』にまとめられたあのころの研究、あるいは折口信夫先生の「まれびと」論などを身に付けて日本に渡ってきたのです。

そして、日本の民俗文化を最も深い深層、起源から勉強するならば、どうしても南西諸島、沖縄、あるいは奄美に渡らなければならないと思って、本当に今から考えると厚かましい限りですが、ある日、柳田先生の成城の自宅に伺って、「実はそういうことをやりたい。どこへ行けばいいのか」と聞きました。柳田先生は全然迷わずに「それは加計呂麻に行きなさい。加計呂麻では今でも琉球王朝時代あるいはそれ以前の文化を見ることができる」とおっしゃいました。実は柳田先生はそこにいらしてから 40 年ぐらいたっていたのですが、昨日のことのように加計呂麻の木慈村や瀬相、俵などのそれぞれの集落の話をされました。後で行ってみれば確かに先生がおっしゃったとおり、ミヤの左側にアシャゲ、右にトネヤがあって、後ろに神山があって、柳田先生の記憶は抜群で私は驚きました。これは柳田先生が亡くなる前の年のことです。

もう一つ、國學院大学の伊藤幹治教授がまだ助手でいらしたのですけれども、柳田先生はその伊藤幹治先生を紹介して、伊藤先生の論文の抜き刷りをくださったのです。それで私は、昭和 36 年ですから今から 50 年ほど前ですけれども、春休みの 2 月の終わりごろに奄美に渡って、名瀬に上陸してから、当時はバス旅行で 1 日かかったのですが、古仁屋ま

で出て、教育委員会にお願いして、加計呂麻の木慈という村の元実久村の町役の方の家を紹介していただいて、そこに行きました。あまりにも温かい迎えをいただいて、ちょっと大げさに聞こえるかもしれませんが、一生で最も幸せな時間を加計呂麻で過ごしました。そして、あまりにも居心地が良くて、東京に帰るのを忘れたのです。とうとう6月の夏学期が終わるころ、指導教官の石田英一郎先生から電報で「君、学校に出てきたまえ」と呼び出されて仕方なく東京に帰ったのですが、その夏は都立大学の先生方と一緒に沖縄のヤンバル・国頭地方を歩きました。そして9月に、今度はウィーン大学時代の友人である立教大学の住谷一彦と上智大学の宗教学者の安斎伸先生を連れて、もう一ぺん加計呂麻に渡りました。それが昭和 38 年です。

そのとき私が深く感じたのは、基本的には日本の文化です。しかし、先ほども話があったのですが、独自のそれぞれのメルクマールがありますから、日本の文化を研究する際には、奄美・沖縄を含めた琉球・南西諸島の文化を視野に入れないと本当の日本文化の幅の広さを理解できないのです。奄美を含めた沖縄は日本の人口のわずか 1%でしかなく、面積もそうなのです。あるいは都道府県の 47 のうちの一つでしかない。しかし、文化史の上から考えると、奄美・沖縄の文化は日本文化の半分に当たるのです。あとの半分は近畿・関西を中心とする大和文化、あるいは江戸時代には東京・関東が中心だったのですが、その同じウエートが奄美・沖縄の文化にはあるのではないかと考えています。

2. 加計呂麻島の概要

奄美というのは、奄美本島とそのすぐ南に連なる加計呂麻島、そしてさらにその南にある与路と請という小さな島です。それを中心に話をしたいと思っています。広いサンゴの島、例えば沖縄伊良部や与論、喜界島などはちょっと違いますから、山ばかりで深い亜熱帯の森に覆われた奄美大島を中心に話します。

奄美の集落のことを向こうの言葉で「シマ」と言っているのですが、このシマは当時は非常に孤立していました。狭い入江の奥、険しい山の麓に家屋敷の家並みが連なっています。そして、防風林に守られて狭い田んぼが当時はあったのです。もちろん薩摩支配の下でサトウキビ生産が強制的に広まっていたのですが、昭和 30 年代の基本的な食料品は自給自足で、米とイモ類、山の幸です。

ソテツの話はもちろんあまりにも有名です。近世を通じて何回も島々は飢饉に襲われて、食料品がなくて、ソテツの実あるいはその幹を砕いて食べました。よく調理しないと、そ

れには毒が含まれているから病気になる、あるいは亡くなる方が多かったのですけれども、戦後はそういうことはなかったのです。

ただ、もう一つの危険なこととして、山に毒蛇のハブがいます。次のシマに続く本当に狭い山道に入る前に、村の出口に「用心棒」という 2m ぐらいの長い棒が木に置いてあるのです。それが何々集落の「用心棒」ということで、それを手に取って、とにかく音を立てながら山道を通って、次の村に入る前にはまたその木にかけて、帰る人がそれを使って戻るのです。

とにかくシマは孤立しています。シマとシマの間の連絡は小さなポンポン船です。それがこの地域の中心地である古仁屋まで毎朝出て、夜にまた戻るのです。今はちゃんと道が整備されてバスさえも走っているという話を聞いたのですけれども、あの当時はバスなど想像もつかなかったのです。

食料品は一方は田んぼと畑、あるいは焼き畑でイモ類中心、もう一つは海から取ってきた魚です。魚を採るのは非常に簡単な方法です。入江の奥に石を列にして、潮が入ってくると、魚は一緒にその石の間に泳いできて、あるいは流されてきて、潮が引くと魚は砂地に残って、女性でも誰でも、私でさえも手で拾うことができたのです。先ほど小熊先生に魚垣という漁法の名前を聞いたのですが、私の行ったところはまだまだ集落の人たちはそれを使っていたのです。だから、ほとんど毎日の食事はイモと魚と一緒に炊いた汁で、場合によっては米もありました。

余談ですが、私がイモと魚と一緒に炊いたものがあまり好きでないような顔をしたようで、島の人たちは私は魚が嫌いなのだと思います。実は、私はヨーロッパ人には珍しくイモを食べないのです。ジャガイモもサツマイモもそうです。初めて毎日イモを食べたのが奄美・加計呂麻です。今でも家内は「加計呂麻を思いなさい、文句を言わないでください」と言います。

奄美の集落は幾つかの屋敷からなるのですけれども、その家屋敷は東北と違って、幾つかの別棟みたいなものがあり、母屋とトーグラ（炊事場）、寝屋、もちろんトイレも別だったのです。幾つかの茅葺きの家から成っているのですが、まだまだきれいでした。今はトタン葺きが多くなったのですけれども、当時は茅葺きの家はむしろ涼しくて、夏の間も居心地が良かったと思います。

そして、あのころはまだ島には人が多く残っていたのです。もちろん壮年の男性、あるいは女性は名瀬あるいはもっと遠くの大阪、関東まで出稼ぎに出ていったのですけれども、

子どもが多かったのです。だから、どんな村に行っても小学校は子どもたちの笑い声がして楽しかったです。

3. 加計呂麻島の宗教

生活の基盤は田畑あるいは海と言ったのですけれども、山と海は集落の世界観にも大きな役割を果たしています。奄美の一番高い山は湯湾岳です。琉球の神話によると、大昔の世の始まりに、まだ天と地が離れていなかったころ、巨人が天を上げて、ようやく人間が歩くようになったのです。そして、その天からアマミキュ、シネリキュという、一柱でしようか、二柱でしようか、湯湾岳に降臨しました。そこから沖縄の久高島に来て、その二柱の兄妹夫婦に 5 人の子どもが生まれました。一番上の男の子は王家のご先祖様、2 番目は按司（あじ、あんじ）、3 番目はお百姓の起源、女性の一番上の姉はノロ（祝女）、ツカサ（司）で、人間と神々の間のお祭りを司る女性のはじまりです。2 番目は普通のお百姓の女性になったのです。それを記念する石碑が明治時代に湯湾岳に置かれました。

同じように、それぞれの村の始まりにはオボツカグラ（天国）から神が降りてきます。その降りた場所を神山といい、オボツ神山とも言いました。大体、高い松の木、あるいは柳田先生もいろいろと説明していらしたのですが、クバの木がそこに残っているのです。

その神々が降りた松の麓には、お神酒とご祝儀、お酒とおかゆ、あるいはお線香を納める拝所があります。その神山の木を切ることは禁止されていたのです。ただ、その麓にある村の草分けのトネヤ、トネモトの家を建てる時には必ず神山の木を使わなければならなかったのです。

山にはもう一つ、オボツカグラ（天国）から降りてくる神と違った性格を持つ山の神もいらっしやいます。山の神は非常に怖い性格です。毎年 3 回戻ってくる庚申（かのえさる）の日に山の神が森を回って自分の木を数えるのですが、その日に山に出ると、下手をすると山の神にさらわれて知らないところまで連れていかれてしまう、あるいは言葉も分からなくなって気が狂ってしまうのです。

当時、郵便配達の若い人の話を聞いたのですが、彼は毎日郵便配達しなければならないので、山道を通らなければならないのです。そのとき、妙な音を伴う風が起きて、自分は訳が分からなくなって、気が付いたときには険しい崖縁の一步前にいて、大きな松の木につかまって助かったのですが、あれから絶対に庚申の日は山に出ていないと言っていました。そういう怖い性格を持った山の神もあるのです。

神山が聖なる場所と考えられていることが分かっていただけたと思います。中世以来、あるいは近世を通じて、現代もそうなのですけれども、神山はさまざまな外来の信仰あるいは伝説と結びつけられることになりました。例えば大島に流されたという源為朝の伝説があり、沖縄の姫と一緒に琉球王国の最初の舜天王がその間に生まれたのですが、奄美にもそういう伝説があります。加計呂麻の実久集落を開拓した実久三次郎は為朝の息子だということで、そのお墓はもちろん神山にあるのです。

今度は源氏ではなくて平家の落人の話ですが、奄美に流されて、そこでしばらく頑張っていたのです。加計呂麻のいくつかの集落には、そこが落人の集落だという伝説があります。そういう村は必ず厳島神社を持っていて、祭っているのです。それもまた神山の麓、あるいは神山の斜面にあります。

もう一つはグンギンです。グンギンは権現ですけれども、仏教あるいは山伏の権現信仰とはあまり関係ない伝説です。実は村々の権現に必ず大きな石が置かれているのです。伝説によると、この石は海から流されてきたといわれており、海に流されてきたという、もう一つの信仰につながってくるのです。

沖縄のニライカナイが先ほど話に出たのですけれども、奄美はネリヤカナヤ、あるいはナルコテルコの国といわれました。これは東の方向、毎朝太陽（テダガナシ）が上がってくるところ、『おもろさうし』にあるアガリ（東）の三島と同じ場所だとされているのです。そこから神々が村を船で訪ねてくるのです。名瀬の立神は有名ですけれども、ほかの幾つかの村には村の出口に立神という大きな岩があります。神々の船が最初に着いて碇を下ろして、そこから神々が村を訪ねてくるのです。

ところが、人間のために非常に大切な宝物ですが、例えば稲の種や火をもらってきたネリヤという国はもう一つの別の性格を持っているのです。それは死んだ人の魂が行く暗い海の底の国です。古事記、日本書紀を読みますと、母の国という性格を持っているのです。ネリヤへの入り口は宇検村の焼内湾の枝手久離にあるのです。だから昭和 30 年代まで、亡くなった人の屍を包んで生地で巻いて枝手久離に持って行って、そこへ埋葬したのです。伊波普猷先生の話を読むと、伊波普猷先生は風葬といって、風に埋めるとしました。柳田先生はそれを良くない言葉だと言って、空葬という言葉を使っています。ネリヤカナヤは両面志向性の性格を持っています。人間にとっては非常に素晴らしい富、恵をもたらす神々の国であると同時に、死者の国でもあるのです。

村に入りますと、中心はミヤという村の広場になります。宮良当壮先生は日本の神社の

「宮」の語源と同じではないかと考えていらっしゃるのですけれども、そのミヤが面しているのは、一方はトネで、村を守る神のお宮です。もう一方はアシアゲ、壁のないノロの祭りが行われる場所です [\(図 3 \(19 ページ参照\)\)](#)。

トネの中には各家にもある火の神様が祭られているのです。小さな土でできたかまどの模型なのですが、そこに三つの小さな石が載っています。この小さな石は、かまどのモデルを作るときに家の女性がまだ人間の足が踏まない朝早くに浜辺に出て拾ってきます。毎朝そこでグジヌシ（男性のトネヤの主人）がお線香をあげてお祈りをするのです。その島を守る神は「島立て世立てはじめの御大将」と柳田先生は名前を伝えていらっしゃいます。

私は奄美にいる間、一つ、転向を経験しました。折口先生のまれびと、来訪神、海の向こうから来る神々の概念を探ろうと思って島に行ってみると、ノロに「違うよ、あなたは。神々がみんなあの世へ帰ってしまうと、この村は存続できない。この村に 1 年中いてその村を守ってくれる神もいますよ」と教えて頂きました。それで私は、原田敏明先生という日本の偉大な宗教研究者の説に近寄ってきたのです。

アシアゲとトネヤの間に石碑があります。イベガナです。村によっては小高い土の丘ですが、これは村のご先祖様のお墓なのです。8 月にはそのお墓の扉を開けて、最もきれいに残った骸骨を前に出して、そこにお酒を供えて一緒に踊るのです。

4. 島の祭り

ノロの主な祭りはたくさんあります。島津時代にはあまりにも祭りが多くて、禁止された祭りがたくさんあったのですが、残っているのは 2 月と 4 月の壬の日に行われる迎えと送り（むけえとおごり）祭りです。ノロをはじめ、神人（かみんちゅ）のイガミはみんな白い木綿でできた白衣と白サジを体に飾って、蔓を編んだものを頭に被って、お祈りをあげて浜辺に下りるのです。迎えのときは神様たちを大きな声で迎えるし、送るときには「やねも一ちたばれ（また来年もぜひいらしてください）」と、場合によっては涙を流して神々とお別れするのです。そして、被っていた蔓（かずら）、あるいは手に持ったアダハ、スズキの葉をネリヤカナヤの神々の世へ流してしまうのです。その日は絶対に男の人たちは船で沖に出てはいけません。というのは、あまりにも美しい神々のお顔に気を失ってしまって、それこそ帰れなくなるのです。

ノロの持っている御印判は首里王朝から出された辞令書です。もう一つは首里から送ってきたみがき扇、非常に素晴らしい大きな扇です。その扇の表には赤い太陽（テダガナシ）、

そして両方に鳳凰が二つ描いてあるのですが、村の解釈では、それは鳳凰か、あるいは鷺、鶴か分からなくなってしまったということです。この扇を開く祭りは、あらほばなという稲作の豊年祭です（[図 4（19 ページ参照）](#)）。そのときは、その年に初めて取れた稲の穂を田んぼから取ってきて神々に供えます。これは村にとって最も盛大なお祭りなのです。村の一番奥、山から清らかな水が流れてくる一番上の田んぼに、お神酒と祝儀、そしてアダハ、スズキを供えて、その田んぼから稲の穂を取ってくるのです。お祭りに唱えるタハベは祈りの言葉なのですが、「稲というものは、鷺や鶴が左脇に押し込めて、ネリヤカナヤから飛んできて人間の世に稲の種を落として、そこから稲が生えてきた」という起源の説話なのです。

[図 5（20 ページ参照）](#)のみがき扇の太陽（テダガナシ）と両方の鳳凰の鳥は中世以降、第二尚王朝時代から首里の王家の紋章でもあるし、沖縄のいろいろな石碑に紋章として残っています。

この祭りのもう一つの特徴は、非常に地位の高いノロ（ウヤノロ）が首里から頂いた銀のかんざしを飾って、後ろにナナハベラ、赤とブルーの三角形が七つつながっている布地を髪の毛から下げている点です（[図 6（20 ページ参照）](#)）。というのは、人間の魂は七つあるとされているからです。一つ、二つぐらい体から出ると、夢を見ている状態です。あまり大きなショックを受けると三つ、四つぐらいが体から離れてしまいます。そのときには易者のユタにお願いしてまた体に入れてもらわなければならないのです。七つ同時に体から出てしまうと人間は死ぬのです。だから、ナナハベラはノロの七つの魂が健在であることを示しているのです。

5. ユタの役割

私が奄美に行っているころ、少しずつ奄美のユタの役割が強くなりました。

ノロと神人（かみんちゅ）の跡継ぎはちゃんと決まっていて、それぞれみんな結婚しています。よくノロや聞得大君は結婚できないといわれていますけれども、実際は母から娘、孫娘、あるいはおばから姪、姑から嫁など、いろいろな跡継ぎの形があるのです。ですが、若い女の人が村にいとなくなると跡継ぎが乱れてきます。そうすると、ユタが呼ばれます。ユタは「体が弱い」、「家に何か不幸があった」などの出来事を、神に拝まなければならない出来事であると解釈して、家人に指示するのです。ユタはそのほかのさまざまな生活の重要な場面に出てきます。例えば旅願いです。私が聞いた旅願いは天照大神にまで頼むし、

あるいは権現様にも頼みます。とにかくユタはいくつかの宗教の流れを含んだ易者の仕事をしているのです。

加計呂麻にはユタは一人か二人いたのですけれども、家に問題があると古仁屋、あるいは名瀬までユタ参りをします。そこにはユタの位の高い者がいたのです。実は私は迷信深いので、ユタに聞くのが怖かったのですけれども、島尾敏雄先生が私を連れていったのです。「この若者はどうすればいいか」と言ったら、「神がついているから好きなことをやればいい」という大変いい言葉をいただいたのです。そのときは 1000 円払ったのですが、非常に安かったですね。非常にいいことを教えていただきました。

6. 仮面仮装行事

最後になりますけれども、村に常にいる神の概念に私はそこで気が付いたのです。同時に折口先生、柳田先生、あるいは大岡先生のいうところの仮面仮装行事はないのかなと思っ
ていろいろと調べました。幕末の『南島雑話』にヤマトガナシという怪物の話が出て
いるのですが、その話にはノロの祭りの夜深くに鐘が鳴って、黒い牛が 8 本の角、8 本の足
を持っている怪物が出ています。そのヤマトガナシは化け物の話として加計呂麻でも聞か
されたのですけれども、仮面仮装行事は加計呂麻と奄美にはなかったのです。もしもどこ
かでヤマトガナシにつなげようと思うならば、薩摩半島の西海岸のガオンガオン祭りとか
になります。その祭りには牛の面が出ているし、牛の踊りがあるのです。

八重山のアンガマとか、アカマタ、クロマタなどのような仮面仮装行事は、奄美の一番
近いところでは、大きな仮面を被った来訪神が出る、トカラ列島の悪石のボシェというお
盆の祭りしかありません ([図 7 \(21 ページ参照\)](#))。

今日は琉球王国の神話から村の世界観、宇宙観まで話を持ってきました。もう一つ言え
ることは、それぞれの家、屋敷の中では火の神をはじめ、さまざまな神が拝まれています
が、そういう意味では、一つの家屋敷がまた聖なる場所であるということです。それを清
めるために、いろいろな悪霊が入らないように屋敷の入り口に魔除けの貝が置かれてい
ることは、奄美・沖縄をご存じの方はよくご存じだと思います。



図3 「トネとあしあげ」(著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図4 「ノロ祭：あらほばな（新しい稲穂の花）」(撮影：芳賀日出男) [\(本文へ\)](#)

みがき扇



図 5 「みがき扇」 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図 6 「ナナハベラ」 (撮影：芳賀日出男) [\(本文へ\)](#)



図 7 「トカラ悪石のボシェ」(著者撮影) [\(本文へ\)](#)

報告 1「近世琉球の生業と島産品」

得能 壽美（法政大学沖縄文化研究所兼任所員）

1. 歴史地図 対外交易の隆盛

[図 8（29 ページ参照）](#)の地図をご覧ください。琉球王国と書かれています。これが一応、一番大きな版図のときの琉球王国ということになります。私は八重山諸島という南西端の地域の歴史研究をしており、例のミミズののたくったような字の古文書を使って歴史的なことを再構築していこうと考えています。

琉球史という一つの歴史の分野がありますが、1609 年に琉球国に島津が攻め込んできて、日本の歴史と同じように近世という時代に入ってきます。それ以前を日本の場合は中世と言うのですが、琉球の場合はいろいろ社会制度など異なる点がありますので、古琉球と言っています。そういう時代には、[図 8](#)の地図で表しているように東南アジアの方に青い線があって、向こうまで船が出かけて行って、いろいろな産品を持ってきました。もちろん空船で行くわけではありません。東アジア、中国や朝鮮、日本と貿易をして生きていた時代があります。いわゆる中継貿易というものがメインで大きかったのですが、これが 14 世紀から 16 世紀ぐらいのことです。

しかし[図 8](#)のように、この貿易を琉球王国という版図全域でやっているかに見える地図というのはちょっと解せないのです。王府、王家、その連中がこの貿易を担っていたわけで、そのほかの島々までが一緒になってやっているというニュアンスではないのです。全体像としてはこういう非常に広い範囲に琉球の船が行って、品物を持って中国、朝鮮、日本と交易する、あるいはものを持ってまた東南アジアに行くというような大交易時代があったのです。

中継貿易の交易品の中に、実は琉球の産品も含まれています。これについては今日会場にいらっしゃっている岡本さんのご研究などがあります。つまり、よその国のものをあっちからこっちにやっているというわけではなくて、琉球の産品を中国へ持っていったりということも実際にはあったのです。そのため琉球国内で作れるものが分かるのですが、古琉球限定ではなくて近世にまでわたります。例えば硫黄が琉球から中国へ持っていかれる時期があるのです。これは琉球王国内で使わないものなのです。そういうものをわざわざ精製して中国へ持っていくというように、貿易のために国として生業的にそういうものを

していました。

もう一つ考えなければならないだろうと私が思ったのは、交易品が琉球を通過するのではなく、そこに落ちるものもあるだろうということです。珍しいもの、おいしいもの、いい香りのするものは、よそで高く売れるから持っていこうというだけではなくて、自分もこれを使おうということになるはずなのです。また、ものが入ってきたり、人が来たりする中では、物品自体ではなくて、技術の伝播もあります。そういったものも琉球に落ちていくはずなのです。各地域にどういう形で伝播していくか、あるいはそれがどうやって伝承されていくのかということも考えなければいけないのではないかと思います。多少誇張しているものもありますが、そういうものが、今現在われわれが目で見られる可視的な琉球文化というものの基を作り上げていった一部ではないかと考えているわけです。

後でご登壇する真栄平さんのご研究にあるように、1767年、18世紀の半ば、これは資料的な制約でそうなのであって、ここから始まったということではないのですが、琉球は中国との進貢貿易をしています。貢ぎ物を持って行って、お返しにいろいろな品物をもらって帰ってくるという貿易をするわけなのです。その中で薬（薬種）の量が多いということは想像しても分かりますが、一番多いものは7万個以上に及ぶ竹製品です。江戸時代になると、東南アジアとの付き合いはなくなり、東アジアだけの付き合いになるわけです。中国、いわゆる高い文明のところから品物を持ってくる中で、竹細工が一番多くて7万個もあるというのが非常に驚きです。つまり、日常生活品が中国から来るわけです。そんなものは何もわざわざ海を越えて持って来なくてもいいのではないかと思いますがいちですが、実態としてあるのです。そのほかに、お茶や傘、針などもあります。ごくごく最近の真栄平さんのご研究によると、竹で作った竹紙など、唐の紙、中国の紙を琉球が輸入しています。

2. ミーゾーキー・ゾーキ

[図9（30ページ参照）](#)は琉球方言で「ミーゾーキー」といいまして、八重山の方言では「ミー」が取れて「ゾーキー」になります。かえって何だか分からないと言われるのですが、これは八重山に残る絵図で、農具を描いてあるのです。方言で何と呼ぶかということが片仮名で書いてある非常に面白い資料です。明治に近い、あるいは明治ぐらいの資料です。地元の農具で、「ソーギ」と書いてあります。形は箕、ザルみたいなものですが、それがこのように描かれています。しかし、その日常生活品を外からの輸入品に頼っているという生活は非常にしんどいです。壊れたらどうしようということになります。

その辺が一つのキーワードというか、キーポイントになって、今回の話を思いついたようなものです。

中国からの輸入品の第2位は薬種だといわれています。18世紀後半に、石垣島を中心とする八重山島で沖縄本島から購入してくる薬代の支払いが問題になっています。薬だけをもらって、支払わないのです。この薬代を何とかしなければならない。つまり、沖縄本島からはるばる石垣島まで薬が来ていたわけです。石垣島の東海岸の白保というところで海藻にあたって中毒で苦しんでいる人がいたという事故が起き、石垣島の中心地である四か村に薬を求めます。さらに白保村の百姓役目に「薬園当」という、薬を栽培している畑だと思うのですが、そこの担当の係が百姓の役目として置かれているわけです。

沖縄本島から持ち込み、沖縄本島からの入り口になる石垣の四か村から持ち込み、さらには地元の村で島産化する。島産化という言葉はないのですが、国産化を図るという言葉があるなら、島産化があってもいいだろうと思います。地続きならば簡単なのですが、地続きではないものですから、その島で何とかしなければならないのです。

日本の近世史のいわゆる鎖国時代、あるいは藩や領国に分かれていた江戸時代の日本でも、領内というか藩内で自分たちで作ってなるべくお金を外に出さないようにしようということがありました。ですから、サトウキビの栽培と砂糖の製造なども江戸時代の中ごろから後半にかけて、一番東は千葉県の房総半島の先に勝海舟が名乗った安房国があるのですけれども、その安房国でも作っています。静岡県遠州灘辺りでも作っています。ここはまた、村おこしでサトウキビを栽培して黒砂糖を作ろうなどということをしています。

また、琉球蘭草という蘭草があります。それは畳表になるのですが、昭和30年代ぐらいまで琉球畳、琉球表といわれる畳が庶民の安い丈夫な畳として日本でももてはやされたのです。そういうものも江戸時代になって、多分一番東は伊豆半島の西海岸辺りでお百姓さんたちが作って換金作物でもうけました。直接琉球人がかかわらないことなのですが、そのようになるべく自分たちで作ろうとしたわけです。そういうことが沖縄の中でもあるし、各島の中でもあるのではないだろうかと思います。

3. 「琉球国由来記」(1713年) 卷三・四の事始

1713年の首里王府が編纂した『琉球国由来記』([図10 \(31ページ参照\)](#))という本があります。地誌といわれるものですが、この中に事始、琉球万物はじめて物語みたいな感じの項目があります。「衣服門」「動植門」「飲食門」「伎術門」などと分けられています。

例えば、「衣服門」の場合、草履は琉球が唐土（もろこし、中国）や大和の制度を見習って作ったのだろう、木の下駄は大和だろう、雪駄も大和だろうということが書かれています。

栽培植物の胡麻や麻、木綿など、由来のはっきりしているものもあります。木綿は儀間真常が、サツマイモは野国総官がという形で、中国から来たり、薩摩から来たりしているわけです。飲食部門の焼酎は今で言う泡盛です。「この国の銘酒なり」と『琉球国由来記』では書いてありますが、これも「洪武の初めに中華に通じて、此時伝来してきただろうか」とあります。お茶なども、薩摩（薩州）から来たのだろうと言っています。日向でもいいわけですが、そこから来たのだろうということです。それから、技術となりますと、朝鮮出兵で捕虜にして連れて来てしまった方々が薩摩にいたりして、そういう方々が焼き物の技術を琉球に伝えてきます。

『琉球国由来記』は1713年の首里王府が公に伝わっていると認めた内容の公伝です。ただ、みんな島々ですから、こんなに簡単にいくわけではなくて、「いやいや、サツマイモは石垣島ではもっと違うところから来ているよ」ということになるので、全部が事実ではないと言うと語弊がありますけれども、これも事実かもしれないけれどもほかの事実もあるというぐらいの、いわゆる公に伝わったと首里王府が1713年ごろに認めていた事実です。由来としては日本、朝鮮半島、それから中国というようなところですが。中国もあちこちありますけれども、そういう形で当時の琉球で飲んだり、食べたり、着たりしたものの入手方法が伝えられているわけです。今で言う東アジアの交流の中で起こってくるのですけれども、果たしてこういうものがどういうルートで琉球国内に伝播していったかということとは個々の事情を見ないといけません。今はそういう作業を一つずつ歴史資料からやっています。

4. 琉球国内の物資の流れ

江戸時代には物品の流れが非常に激しくなります。石垣、宮古から御用布という布、木綿の綿、それぞれの作物などいろいろなもの、そして沖縄本島の中からもさまざまなものが調達されます。これは豊見山和行さんの最近の論文の中に一覧表になっていて、海産物など非常に面白いです。

もう1つ、注目していただきたいのは、「大和商人」という人々が代行して上納物を持っていったりすることがあったことです。船は空では行きません。空気を運んでもしょうがないですから、行きも絶対に何かを乗せていくのです。とにかくものを持って行って、そ

こで売ります。売るといっても貨幣経済があるわけではありませんので、地元のものと交換します。

大和商人が行って、いいものを運んでくるものですから、八重山の人たちはお米や布など王府が税品目として指定しているものをどんどん交換してしまっ、王府は本当に怒るのです。しかし、大和商人をはじめとする彼らの動きは止められません。

こういう形で、八重山は八重山で、島産品として島の中で作れないものを外から入れます。鉄鉱石がありませんから、放っておくとずっと石器時代なのです。それを北から沖縄本島経由で鉄を入れて、ようやく加工して鉄器時代になるわけです。「沖縄は戦後にまた石器時代に戻った」とおじいと言っていたのを思い出しますが、ないものはないわけです。彼らの生活に使うものがこういう公のものと別に、私的に運ばれてきたりしていました。

5. 八重山 石西礁湖

では、どんなところで生活しているか。[図11（32ページ参照）](#)の右上が石垣島の南西部です。竹富島があつて、小浜島、「ちゅらさん」の島があつて、それから西表島の東半分が見えていて、新城島、黒島となっています。石西礁湖と書いていますが、石垣島の石と西表島の西、その間に広がる珊瑚礁の湖を石西礁湖といいます。薄い青いところは珊瑚礁があつて、深くないのです。青いところは深いのです。このようにずっと白くなっていて、浅瀬になっています。海人（うみんちゅ）の方はプールみたいだと言います。島と島の間で、ちょっと海流が激しいところもありますから、遭難もないわけではないのですが、非常に浅いです。

どういう生活をしているかというと、例えば石垣島と西表島で言えば、山があつて、川があつて流れていくということは、淡水があつて稲作ができるのです。小さな島は、山もなくて川もなくて、降った雨は全部地面にざあっと行ってしまうわけですから、当然稲作はできないし、飲料水にも事欠くという島になるわけです。では、どうするかというと、アワは作れないことはないのですが、竹富島の場合、西表島の由布島に渡って行って、対岸の西表島で米を作って持って帰って生活するのです。人头税といわれる上納物もそういう米を上納させます。ちょっと日本では考えられないのですが、竹富島は竹富村、こちらはこちらで村なわけです。そういうことを黒島は黒島でするし、新城もします。写っていませんが、もっと南の波照間島もそういうことをするし、左上の方にある鳩間島も西表に

対してそういうことをします。石垣島は人口が多く、小さな島の面倒までみてもらえないので、江戸時代の途中で「小さな島は全部西表に行きなさい」となるのです。山林もあるわけですから、木を伐採して家も作るという格好になります。

なぜそんな不便なところに住むのだというそもそもの話をし出すと、これがなかなか分からないのです。淡水があるということは水もよどみますので、そこにはボウフラがわくのです。そのボウフラが当然、蚊になるわけです。マラリアを媒介するということです。ご存じでしょうが、西表に戦時中に強制疎開をさせられて、マラリアで戦病死するのです。石垣島の中でもあります。淡水がないところにマラリアはないわけです。

これはもう、人生の選択です。水があって、川があって、稲作ができて、でもちょっと行くと山の中にマラリアがある。あるいは、水もなくて、飲料水もない、米もできない、だけどマラリアがないということです。そういう中で生活しますから、島を渡った生活をするわけです。

6. 18 世紀～20 世紀石西礁湖をめぐる通耕ネットワーク

[図 1 2 \(3 2 ページ参照\)](#) は私がまとめたのですが、18 世紀から 20 世紀に各島々に矢印が行っています。水田、畑地、あるいは飲み水、材木を求めて、こういう形で日常的に行き来しています。日帰りばかりではないですけども、一番遠いところはこんな形で生活しています。これが生業のあり方というか、生活のあり方なのです。その上に、先ほど言ったような新しい文化が入ってきて、新しいものも作るようになります。あるいは、たばこなども作りたいのだけれど、これはできない。ではどうするかというと外から買ってくるのです。

もう 1 つお話しておきたいのは、ナマコについてです。ナマコが取れますので、ナマコを干します。これをイリコと言うのですけれども、最近ジャコだったり何だったりとややこしいのですが、ナマコの干したものを首里王府は上納しろと言っています。これは大変な作業になるわけです。先ほどのような生活をしなければならない上に、そういうことがかぶさってきます。イリコはどうなるかというと、首里王府から中国への産品、あるいは徳川幕府への献上物にもなるのです。

新城島を例にすると、農業をするには島は狭く畑地しかないですが、西表島の南風見村というところに耕地を有しています。しかし、それだけでは生活ができないので、水甕（みずがめ）や炉、土鍋・諸焼き物、それから、筵（むしろ）、箕（み）のたぐいを作って

他島に渡っています。焼き物はパナリ焼という焼き物で、それ以外に筵と箕を作っています。これが一番最初に問題にしたミーゾーキ・ゾーキです。こういう、ものの技術伝播が分かるのかどうか難しいのです。編むという行為の技術の伝播はどこまで分かるか分かりませんが、この時期の新城島の方々は箕も作って八重山の島々に売っていたということが書かれています。先ほど、島のものでなければ大変なのではないかと言ったのですが、ほかの島ですけれども、しっかり島のもので作ってやって、そのネットワークで島々が生きているということです。

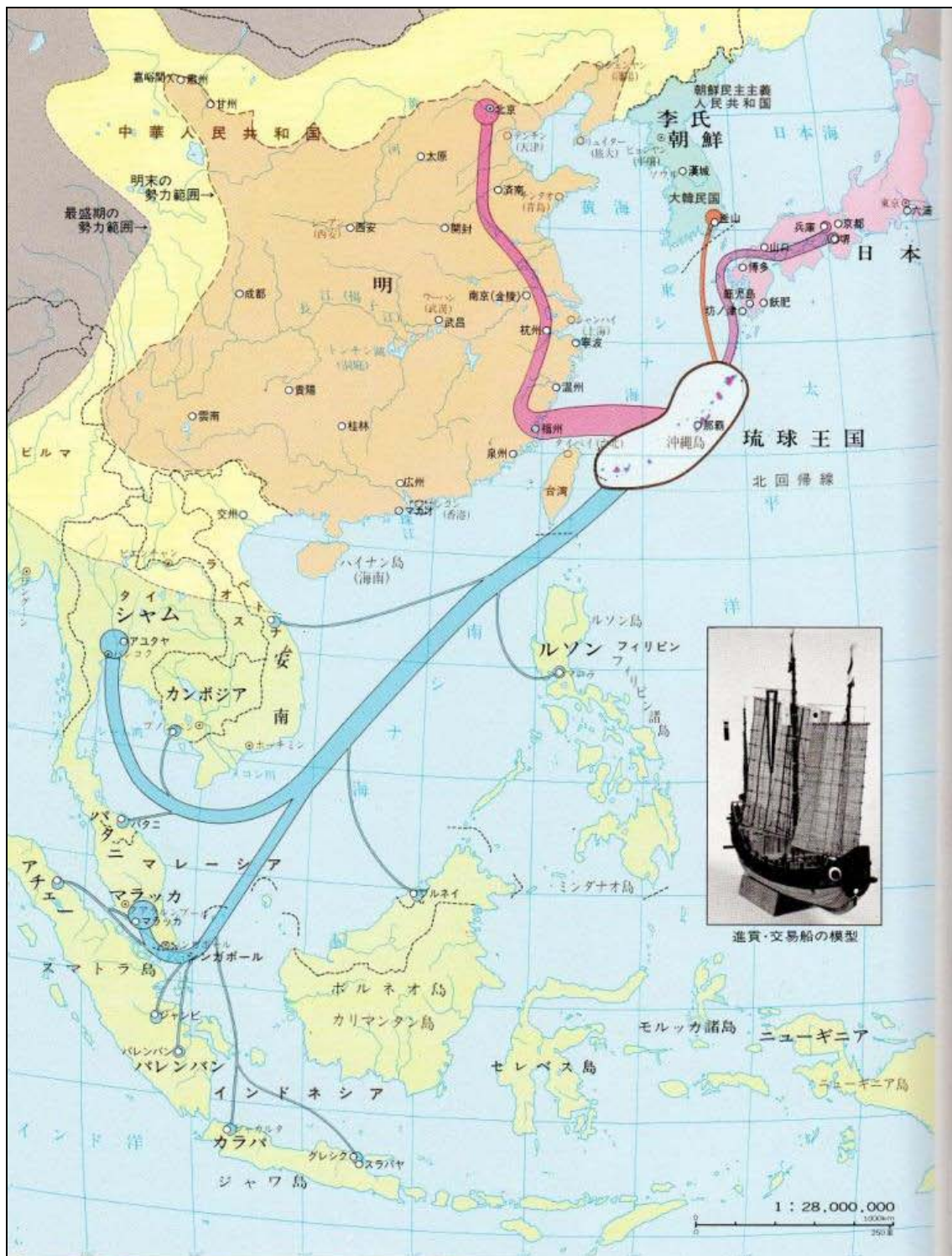


図8「古琉球の対外交易」(出典:『沖縄歴史地図』柏書房) [\(本文へ\)](#)、[\(パネルディスカッションへ\)](#)

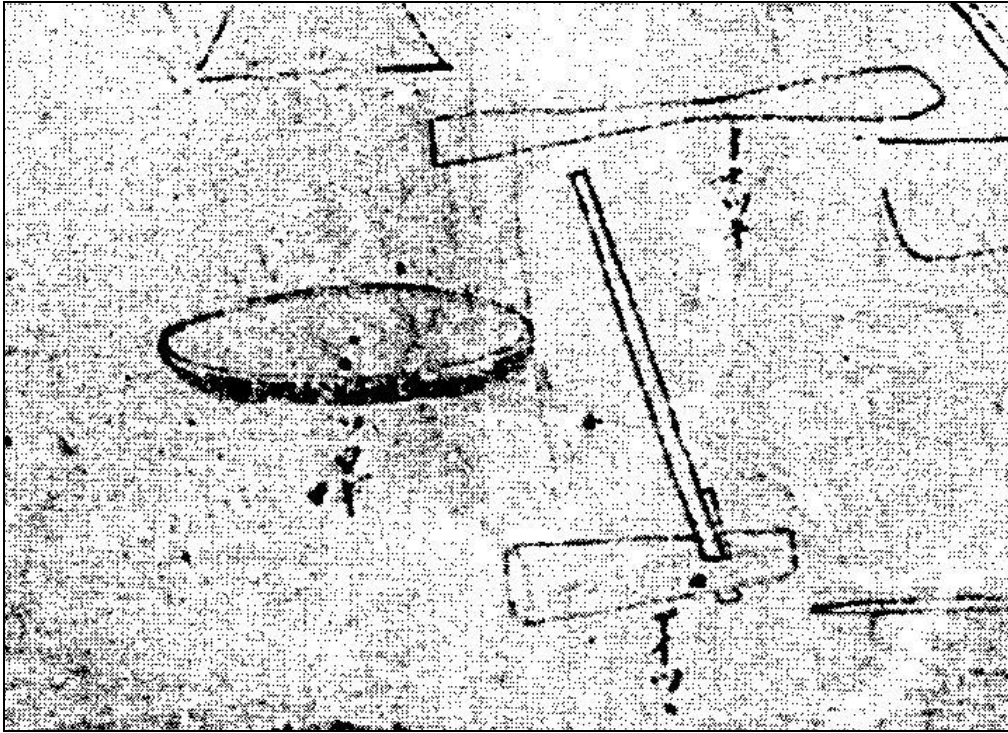


図9「ソーキ」(出典:「八重山島農具并士族平民風俗之図」)[\(本文へ\)](#)

【「琉球国由来記」（1713 年）卷三・四の事始】

①衣服門

草履…唐土・大和之制ヲ見テ作り始ルナラン

木屐…見大和之制、作ルナラン

雪踏…中頃ヨリ、慣倭国之制者歟

②動植門

胡麻・胡葵・大蒜・安石榴・葡萄（葡）…或從漢・和帶來乎

麻…往古ヨリ有此歟、且從倭国持來哉

木綿…万曆三十九年、麻氏儀間親雲上真常、從薩州帶來栽種

蕃薯…万曆三十三年、總官野国從中華、鉢植帶來

番椒…從薩州持來歟

西瓜・苦瓜・長瓜…從中華帶來、栽種ナラン

煙草…万曆年中、從薩州帶來、始栽之者歟

蚕事…万曆四十七年、盛氏宗味普基〈原越前国生産也。本氏坂元〉航久米島飼蚕

③飲食門

塩…所ノ古老曰、上古、日本人、本国ニ來テ教ヘタル由申伝也

焼酎（泡盛）…洪武ノ初、中華ニ通ズ。此時伝授シ來テ、制之歟

茶…從上古有之歟、天啓七年、尚氏金武王子朝貞、茶種從薩州帶來

④伎術門

貝摺師…崇禎九年、国吉、入閩三年滞在、學員摺塗物

火花…弘治二年、比屋勢頭親雲上、赴于中華、伝來火矢葉・火花法

瓦工…往昔、唐人渡來、而真和志間切于国場村居住、同間切真玉橋村焼始也

畳刺・簾細工・皮細工・組物細工・貫物細工・鼓張・糸組…通中華以後始乎

彫物…通中華以後、有之歟

蠟燭作…康熙二二年、兩勅使來臨之時、閩人河口通事憑老、為師、那覇住人長嶺掟親雲上、伝授之

染物師…前代者有木皮染、万曆四十年藍染初也。薩州之人、酒匂四郎右衛門景陳、剃髮稱善濟、当地居付、此人教于国中也

紙漉…康熙二五年閩氏大見武筑登之親雲上憑武、於薩州杉原・百田紙漉法、為師草野五右衛門伝授來

磨物師…順治元年若狹町村外間爾也、到于薩州、三年滞在稽古

陶工…万曆四四年尚豐王為佐敷王子時、渡御于薩州。其時高麗人一官・老六・三官云三人之者御召列御帰国也。本国之于人教陶（略）一六者本国滞在為居住、結片髮、仲地名付。其子孫于今泉崎湧田、崎山云人也

轆轤…安里掟〈原隅州国分之人、鮫島六良兵衛云〉從国分于船路將至覽府時、逢逆風而漂到于当国（略）移居于若狹町村、而始轆轤也

檜物師…順治元年那覇仲村渠爾也、到于薩州、三年滞在致稽古

錫細工…康熙年間、伊指川筑登之親雲上、於閩伝授來也

墨造…若狹町邑大嶺筑登之、於中華伝授來〈時康熙年間〉

筆結…崇禎四年薩州住人源介本国渡來、結片髮稱運天、此人首里于町端居住、結筆也

図 1 0 「琉球国由来記」 卷三・四の事始（『定本琉球国由来記』より作成）[\(本文へ\)](#)



図 1 1 「石西礁湖」(提供：沖縄総合事務局石垣港湾事務所) [\(本文へ\)](#)、[\(報告 2 へ\)](#)

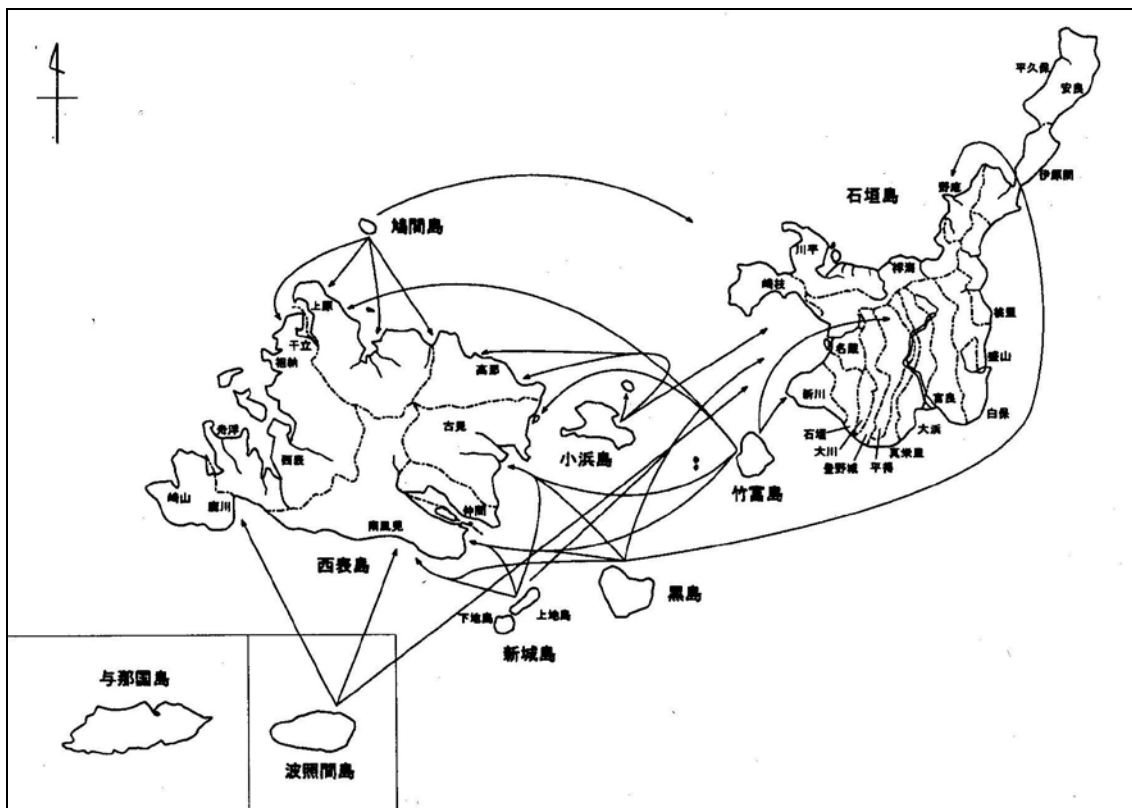


図 1 2 「八重山における通耕地図 (18～20 世紀)」

(出典：『近世八重山の民衆生活史』) [\(本文へ\)](#)

報告 2「八重山諸島の先史時代」

島袋 綾野（沖縄考古学会会員）

今日は「八重山諸島の先史時代」というタイトルをあげています。できるだけ言葉を易しくてお話ししたいと思うのですが、今日の話には、皆さまが教科書などで習ってきたような、例えば日本史の最初の方で見聞きしたようなお話は出てこないと思います。そんな日本の南の端っこの先史時代のお話をしたいと思います。

1. 八重山諸島の考古学

(1) 八重山考古学って何だろう？

早速ですが、なぜ八重山考古学と題したのかというお話をしたいと思います。実は八重山諸島では、皆さまになじみのある縄文時代や弥生時代といった時代の文化、またはその影響を直接受けたような遺跡や遺物、道具などが見つかりません。そのため、沖縄本島や周辺離島、奄美諸島とも違うという事情があります。

その代わり、もっと南の台湾やフィリピン、オセアニアなどとの関係が考えられています。そのため、琉球考古学でも沖縄考古学でもなく、今回は八重山諸島の考古学ということで、先史時代についてご報告いたします。

[図 1 3（4 2 ページ参照）](#)をごらんください。この地域は先ほど申しましたように沖縄本島などとも違うもので、こういったほかの地域とは違う独自の考古学編年を使って、考古学の遺跡の概要などを紹介しています。考古学編年も、これ一つに定まっているわけではなく、まだ議論されている段階ではありますが、今回は石垣市役所の方で出している石垣市史の本に合わせて、石垣市の考古学編年で話を進めます。

少し宣伝になりますが、私が前にいた石垣市で出した『石垣市史考古ビジュアル版』というシリーズがあります。こういった研究史の中でも、そういった編年研究の問題や今日お話しする内容も紹介されていますので、図書館などで見かけたらぜひ読んでみてください。

(2) 先史時代各時期の特徴

八重山諸島の先史時代の中にはいわゆる旧石器時代、下田原期、無土器期という三つの

時期が入ります。今日は具体的に遺跡の概要などを紹介していきます。

まずは旧石器です。旧石器時代に属する資料は八重山諸島では長い間未発見でした。しかし昨年、新聞などにも掲載されてご存じの方も多いかもかもしれませんが、白保の竿根田原洞穴というところで旧石器時代の年代が得られた人骨が見つかり、八重山諸島にも旧石器の可能性がかなり大きくなってきています。

この旧石器の白保竿根田原洞穴は、まだ報告書ができていませんが、今まで公式に発表された情報から紹介しますと、約2万年前の人骨をはじめとして、1万8000年前、1万5000年前というような年代が得られているようです。明確な道具類、いわゆる旧石器というものがまだ見つかっていない、正式に報告されていないのですけれども、どうやら継続調査が決まったようですので、今後の展開に期待したいと思います。

2. 八重山先史時代（下田原期）

（1）下田原期の遺跡

旧石器に続いて、下田原期の遺跡ということになります。時期としては、皆さまの感覚で言うと多分縄文時代に当たるのですが、縄文時代でも後期に近い年代です。今から約4300年前から3500年くらい前に中心を持つ遺跡です。

この下田原期の遺跡は、人が生活した痕跡が残る、または遺跡や遺構、道具類がそろった中では八重山諸島で一番古い文化ということになります。この下田原は、波照間島に下田原貝塚という遺跡があり、そこが標式遺跡ということになっています。

遺跡の立地に関しては、近年の地質や地理学的な研究から、この時期は現在よりも0.2～1mほど海水準高度が高かったということが考えられています。

（2）石垣島の名蔵湾付近

[図14（43ページ参照）](#)は名蔵アンパルという石垣島の西海岸にある湿地帯なのですが、その周辺には遺跡がたくさんあるので、ここを例に少しご紹介します。

名蔵アンパルと呼ばれている湿地部分を今、青い線で囲いましたが、この部分は下田原期、今から4300年前くらいには海だったと考えられています。それを見ますと、下田原期の遺跡ということで、大田原遺跡や平地原遺跡という遺跡を紹介していますが、この部分は海に近いです。今は内陸に見えますけれども、当時は海に近い赤土の台地上に立地していたということが考えられます。

(3) 下田原期の遺跡の立地

下田原期の遺跡の立地をまとめますと、大体三つぐらいのパターンに分けられます。この立地は後で次の時代の無土器期と比較するときにもまたご紹介しますので、頭に入れていただければと思います。

石垣島で、例えばこの時期の代表的な遺跡というと、名蔵の方にある大田原遺跡や平地原遺跡、また石垣島の北西部の方にある川平という地域のピュウツタ遺跡などがあります。また、崎枝も西海岸ですが、石垣の西海岸の崎枝赤崎遺跡などがあります。そして先ほど言った波照間島の下田原貝塚、また、その北限は多良間島です。多良間島は石垣島と宮古島の間になりますが、多良間島の添道遺跡というところになります。

遺跡の分布をまとめますと、[図 1 5 \(4 3 ページ参照\)](#) のような形になります。与那国島のトゥグル浜遺跡から多良間島の多良間添道遺跡の範囲に下田原期の遺跡があります。

(4) 食料

次に何を食べていたかという話をしていきたいと思いますが、このころには稲作の痕跡などは見つかっていません。

その代わり、遺跡からは貝殻や動物の骨などがたくさん見つかります。イノシシの骨は現在生息が確認されていない波照間島、多良間島などの遺跡からも見つかっています。

貝類などは、マングローブの中やリーフの内側、リーフの際などに生息する貝が多く見つかります。また、シャコガイなどの 2 枚貝やチョウセンサザエ、サラサバテイ（タカセガイ）などもほとんどの遺跡で見つかります。

西表島のヤマノイモは子どもの頭の大きさほどになるものもあります。こういったイモ類を食べていた可能性はあるのですが、考古学上その痕跡が発掘によってまだ確認されていないので、明言できない状態です。

(5) 下田原期の人工遺物

下田原期の主な出土遺物としては下田原式土器やその他、石器や貝製品などがあります。

先ほども少し申しましたが、考古学上の基準となる標式遺跡があります。下田原式土器もこの下田原貝塚から見つかった土器を基準として、このような形、タイプのものを下田原式土器と呼ぶという考古学上の約束事の名前になっています。

[図 1 6 \(4 4 ページ参照\)](#) は川平のピュウツタ遺跡の資料ですが、こういった土器が見つかります。ここにちょっと耳が付いているのですが、これは牛の角のような牛角状の把手です。このような耳が付いた土器や、ラグビーボールをカットしたような鉢形土器、また、コップ型のような小さな土器なども見つかっています。こういったものもみんなまとめて下田原式土器と呼んでいます。こういった資料を見ながら、皆さまのお住まいの地域の縄文後期の土器がどんなだったかなと思い出しながら、頭の中で比較してみてください。

この下田原式土器がどこから来たかという話なのですが、実はまだよく分かっていません。今、三つの説が大きく考えられています。私も[図 1 6](#)のような図を見せられると、いろいろな地域の土器を見たいと思って、台湾やオセアニア辺り、フィリピンの同時期の資料も見せていただいたりしているのですが、まだそっくりだなというものにはたどり着いていません。[図 1 7 \(4 4 ページ参照\)](#)

次は石器です。出土遺物の中で土器の次に多いのが石器になります。八重山諸島には、石垣島と小浜島と西表島という三つの島にトムル層という層があります。黒色片岩や緑色片岩、斑れい岩などが含まれる層なのですけれども、この層に由来する石を使って石斧などを作っています。この層がないほかの島でも、同じようにトムル層の石を使って石器を作っています。

その他、これはビーズ類などですけれども、貝製品、そして骨製品なども作っています([図 1 8 \(4 5 ページ参照\)](#))。骨製品はほとんどイノシシの骨を使った道具が多いです。最初に申しましたように、時期は縄文の後期ぐらいに相当する遺跡となっています。

3. 八重山先史時代（無土器期）

(1) 無土器期の遺跡

次に無土器期の遺跡の紹介をします。これが八重山諸島の考古学で一番謎が多い時期になります。無土器といても、いわゆる旧石器ではなくて、新石器を利用する無土器期ということです。つまり、土器が見つからない遺跡があるということです。石器の製作技術を後でまた詳しく紹介しますが、その技術などを見ると進んでいるのだけれども、土器を使っていないという不思議な文化になります。时期的には本州で言うと弥生～平安時代に相当する長い時期を持つ文化となります。

下田原期の遺跡が多良間島から波照間島までだったのですが、この無土器期は宮古島も含めて見つかります([図 1 9 \(4 5 ページ参照\)](#))。下田原期の分布から大きく広がった範囲で

無土器期という遺跡が見つかるようになります。

先ほど白保の人骨のことを話しましたが、この時期は下田原期も無土器期も明確なお墓が見つかりません。人骨の破片は少しずつ拾われているのですが、まだ量も少ないということから、考古学からも、形質人類学からもまだアプローチが進んでいない分野になります。しかし、白保竿根田原洞穴の時期ではないかと考えられる層から人骨が複数見つかりしているということです。ですから、今後こういった人類のルーツ、八重山の先史時代人のルーツが分かってくるかもしれません。

この無土器期は、八重山諸島で始まるのが約 2000 年前、紀元前後ぐらいということが炭化物を使った年代測定で分かっています。しかし、下田原期と無土器期の間に、八重山諸島では約 2000 年の空白があります。[図 1 3 \(4 2 ページ参照\)](#) の編年では「未発見の空白期」と書いています。その時間を埋める遺跡はまだ見つからないということです。

あらためて無土器期の放射性炭素年代という炭化物を使った年代のお話をしますと、宮古では約 2700 年前のアラフ遺跡という遺跡、八重山諸島では約 2000 年前の名蔵貝塚という遺跡、また、1800 年ぐらい前の大泊浜貝塚という波照間島の遺跡になりますが、そのころから始まって、その終わりとはいうと 12 世紀の初頭ぐらいだということが確認されています。宮古島ではこの年代からも分かるように、八重山諸島より全体的に若干古い年代が得られているという現状があります。これによって、宮古諸島と八重山諸島の無土器期が本当に同一なのか、それとも宮古が先で八重山が後という先後関係で説明できるのかといったところも、まだ問題として残されています。

(2) 無土器期の遺跡の立地

先ほど下田原期の遺跡立地で少し触れたように、下田原期の遺跡は赤土の台地上に多く見られるという特徴がありますけれども、無土器期の場合は砂丘に多く立地するというように、遺跡のある場所もこの二つの時期で異なっています。石垣島を中心に見た場合、この無土器期のちょっと前に礁嶺を伴う珊瑚礁の発達が見られて、数千年前の下田原期よりもさらに海産物を求めやすい環境になったのではないかとということが考えられています。

同時に、下田原期と無土器期の間には海岸線が沖側に移動したという可能性もあります。海退という言葉聞いたことがあるかもしれませんが、その現象です ([図 2 0 \(4 6 ページ参照\)](#))。その結果、現在、下田原期の遺跡はちょっとした高台で見つかるのですが、下田原期に続く人々はそれよりももっと海側に集落を移してしまったために、現在は痕跡が

見られないのではないかという考え方もあります。海進・海退という海的环境によって約 2000 年という未発見の空白期が生まれているのではないかという議論がなされています。

しかし、これとはもう一つ違う視点もあります。海進・海退という問題だけではなくて、今、3・11 の津波で八重山の 1771 年の明和大海津波もよくメディアで取り上げられたりするようになったのですが、八重山諸島では現在の研究では約 3400 年前、約 2400 年前、約 2000 年前にも大規模な津波があったと考えられています。こういうことを取り上げて、八重山諸島は津波の常襲地だと言う研究者もいます。こういった津波の影響によって遺跡が残らないという考えも、今のところ検討すべきものだということで、私もよく津波の研究の先生方と一緒に遺跡めぐりをしたりしています。

先ほど無土器期の遺跡が砂丘上に多く立地しているというお話をしましたが、これらの遺跡の多くは、約 2000 年前に堆積したと考えられる新期砂丘と呼ばれる砂丘上に立地しています。現在で言うところの、海岸線に白く砂が堆積しているというのが八重山の海のイメージであるかもしれませんが、その砂よりも一つ後ろの、今は防潮林の内側になっているところの砂になります。そういった場所に無土器期の遺跡は立地しています。

[図 2 1 \(4 7 ページ参照\)](#) の分布図で、海岸線に近いところに多くのポイントが打たれていますが、これが無土器期の遺跡の立地になります。ほとんどがこういった海の近くに立地しています。これを見ても、ほとんどが標高 3m から 5m ぐらいの間に収まるのですが、大泊浜貝塚というところが約 8m です。これでも高い方です。

まとめるとこのような感じで、数だけ見ますと、その前の下田原期に比べておよそ 3 倍という遺跡の数になります。

ここでは少し遺構についてもお話したいのですが、無土器の特徴として挙げられる中で、焼石調理の痕跡というものがあります。なぜ焼石調理かという、最初にも言いましたが、この時期は土器が見つかりません。その代わり、石蒸し焼きなど、これも南の方の地域に民俗例などがありますが、そういった痕跡ではないかということです。石蒸し焼きやアースオーブンなどの痕跡が見つかりました。焼石調理といっても、実はいろいろな調理法があり、焼く、蒸す、ゆでるということもこの焼石調理で可能です。

(3) 食料

その焼石調理で何を食べていたのかということですが、無土器期にも稲作の痕跡は見つかりません。約 2000 年前の時期から 12 世紀の初頭になるまで稲作の痕跡が見つかり

ていないのです。その代わり、貝殻や動物の骨などがたくさん見つかります。

イノシシの骨や貝殻を比べてみても、その前の下田原期とほとんど変わりません。先ほど得能さんの発表の中で石西礁湖の画像（[図 1 1（3 2 ページ参照）](#)）がありましたけれども、そういった豊かな海の恵みに支えられてこの人々は生活をしていたと考えられます。

（4）無土器期の人工遺物

この無土器期は土器のない文化なのですが、こういったものが出るのかといいますと、最も多いのは石器、石を使った道具で、特に石斧が多く見られます。

無土器期にはいろいろな大きさの石斧、またはいろいろな形、本当にただ割れたものに刃を付けたのではないかと思われるようなものがあります。全面をつるつるに磨いたものもありますけれども、こういった石斧も下田原期には見られない形です。

無土器期の石斧と下田原期の石斧を少し比べてみます。この二つは実測図という報告書などによく載っている図面なのですが、今回は分かりやすいように磨かれた部分に色を付けてきました（[図 2 2（4 8 ページ参照）](#)）。

この二つは、形は似ているのですが、右側の方に多く磨かれた部分があるのです。左側が下田原期のもので、右側は無土器期のものになります。このように形はそっくりなものが出ても、磨き方や、細かいところを言うと側面の縁辺部のつぶし方にも違いが見られます。

このほかに無土器期の特徴的な資料、遺物としてはシャコガイで作られた貝斧というものがあります。この貝斧は宮古島の無土器期の遺跡では石斧よりもたくさん見つかります。一つの遺跡で 200 本以上見つかったという浦底遺跡という遺跡の例もあります。利用されるのはシャコガイのちょうつがいの部分と肋の部分ですが、不思議なことに、宮古諸島では肋の部分を利用したものもあるのですが、八重山諸島ではちょうつがい部を利用したものだけが見つかるという違いがあります。

使う部位を簡単に説明しますと、肋利用型では放射肋を縦に、ちょうつがいは分厚くなっているところを使うということです。このようにしてシャコガイで斧を作っています（[図 2 3（4 8 ページ参照）](#)）。

このシャコガイ製の貝斧が文化的な特徴でとらえられるのは、琉球列島を見ても宮古諸島や八重山諸島を含めて先島諸島だけということですが、これがこの地域に特化した文化かということ、そうではありません。フィリピンやオセアニアなどで利用例があり、また、

民俗事例でも確認されています。こういったことを根拠に、この文化は南方から来た文化だと考えられています。

[図 2 4 \(4 9 ページ参照\)](#) は石垣島の崎枝赤崎貝塚から出土した円盤状製品で、シェルディスクと呼ばれるものです。大型のマキガイ、具体的にはアンボンクロザメやクロフモドキという種類の貝の頭の部分（螺塔部）を利用した製品です。[図 2 5 \(4 9 ページ参照\)](#) に紹介したのはフィリピンのパラワン島のドゥヨン洞穴というところの資料ですが、こういった石斧や貝斧、シェルディスクがセットで見つっている例があります。これは年代的な問題があって、こちらの方が八重山諸島の無土器期よりもずっとずっと古い年代が得られているのです。年代の問題はありますけれども、このようにそっくりな資料がフィリピンなどでも見つっています。最近では台湾でも同じように貝斧とシェルディスクが一緒に見つかる遺跡が発見されたと聞いています。まだ報告書は出ていないと思うのですが、とても興味のある資料です。

変わったものとしては、中国の唐の時代の銭貨、開元通宝というお金が出土します。これは初めて作られたのが 621 年といわれています。今日の午前中にこの館を回ってきたのですが、10 階の方に難波宮からこの開元通宝が出たということで資料展示しているのを確認しました。

この崎枝赤崎貝塚などの出方は面白い現象です。ほかの地域を見ますと、こういったお金は貿易に関係する公の港や官衙（役所）、先ほど言った難波宮なども含めて主要なところで見つかる傾向があるのですが、八重山諸島の崎枝赤崎貝塚はいわゆる一般集落です。そこで全部で 33 枚という量が見つっています。こういったことから、おそらくこのお金を持った人々、中国唐の時代の人々と八重山諸島の無土器の人々が何らかの形で接触していたのではないかと思います。

これまでもお話ししてきましたように、先史時代の八重山はとても個性的で、沖縄本島以北とも違う文化を築いていました。その文化が 11 世紀末から 12 世紀頭にかけて、なんらかのきっかけを持って九州以北や沖縄本島の周辺の文化と融合を始めます。

無土器期が終わるころに、北の方から（九州博多の商人ではないかという研究もありますが）そういった外の人々からもたらされる文物などによって新しい時代へと移り変わっていきます。ちょうどそのころに八重山諸島だけではなく、沖縄本島周辺ではいわゆるグスク時代になっていきますし、宮古諸島でも変化が見られます。

無土器の終わりにもたらされるもので代表的なのはこういったもの（[図 2 6 \(5 0 ペー](#)

[図27\(5\)](#)参照))です。沖縄の考古学の人々が3点セットと呼んでいるもので、中国北宋の陶磁器、長崎産の滑石製石鍋、徳之島産のカムイヤキです。

ほかに、無土器の終わりには鉄製品も見つかるようになります。鉄鑿や船釘などが無土器の遺跡から見つかります。

(5) 下田原期と無土器期の逆転

八重山諸島の先史文化をまとめますと、土器のある文化から約2000年のブランクがあり、無土器という文化になります。このつながりは、もしかすると海進・海退や大津波の可能性もあるかもしれませんが、今のところつながりが分かりません。そして無土器の終わりにいろいろなものが入ってくるようになって、いわゆる歴史時代、原史時代と呼ばれる時期になり、また土器を作り始めるということで、土器→無土器→土器という全国にもまれな変遷をします。

紹介したように、土器がなくても調理はできるのですが、やはり通常は無土器から土器を作り始めるということを考える方が分かりやすいわけです。ただ、八重山では逆行したような流れがあるということです。

1959年に早稲田大学が八重山の調査に入ります。そのときに提唱されたのが[図27\(5\)](#)[0ページ参照](#)の編年で、通称「早稲田編年」と呼ばれるものです。これを見ますと、一番古い時期として無土器期が紹介されて、次に有土器の下田原期が紹介されています。古い編年ではこのようになっていたわけです。

石垣島の大田原遺跡と神田貝塚の調査において、下の方が大田原遺跡(下田原期)の層、上の二つが神田貝塚(無土器期)の層になっているという堆積が確認されました。

[図28\(51ページ参照\)](#)は普通にものを積み上げていくことを示していますが、下から上へと新しくなります。これを地質学では地層累重の法則といいます。この流れでいいますと、下にあった有土器の下田原期の大田原遺跡の層の方が古い、上に乗っている神田貝塚の方が新しいという考えです。こういった考えにもよっても、この逆転が明らかになっていくわけです。

4. おわりに

かなり大急ぎでお話ししましたが、ご紹介したような内容は八重山の考古学で分かっているところの本当に特徴的な部分です。この地域の先史文化が終わるころ、12世紀

初めごろには北からの影響で稲作が始まります。そして土器が作り始められます。そのほかの文物ももたされてきます。その後に、いわゆる琉球王国の版図に入っていくわけです。

編 年			土 器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡	その他の編年表記
先 史 時 代	旧石器時代	(参考) $^{14}\text{C}20416 \pm 113$ $^{14}\text{C}18752 \pm 100$ $^{14}\text{C}15751 \pm 421$					白保竿根田 原洞穴	
	下田原期	(参考) $^{14}\text{C}4250 \pm 50$ $^{14}\text{C}3970 \pm 95$ ↓ $^{14}\text{C}3290 \pm 90$ $^{14}\text{C}3280 \pm 100$	下田原式土器	石斧	無し	砂丘後背の微 高地	下田原 仲間第二 大田原 ビュウツタ	後期下半(多)、第二期 (早・當)、ステージⅡ (國)、中期(三)、新石 器時代前期(安)、下田 原貝塚文化(高)、第一 期(大)
	(未発見の空白期)							
	無土器期	(参考) $^{14}\text{C}1770 \pm 85$ $^{14}\text{C}1770 \pm 70$ ↓ 12世紀前半	無し	貝斧 石斧	開元通寶 中国陶磁器(北宋末)が 僅かに出土 徳之島産カミイ窯須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤崎	後期下半(多)、第一期 (早・當)、ステージⅠ (國)、前期(三)、新石 器時代後期(安)、仲間 第一貝塚文化(高)、第 二期(大)
歴 史 時 代 (原)	新里村期	12世紀 ↓ 13世紀	新里村式土器 ビロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器(北宋末～南 宋)が少量出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ビロースク の2・3層	川平貝塚文化前期 (高)、スク時代 前期(大)
	中森期	13世紀末 ↓ 17世紀初	中森式土器	無し	中国陶磁器(元～明)が 大量出土	丘陵上や平野 石垣が登場	鳩間中森 フルスト原 新里村西 花城村	晩期(多)、第三 期(早・當)、ス テージⅢ(國)、 後期(三)、川平 貝塚文化前期 (高)、スク時代 後期(大)
	バナリ期	17世紀 ↓ 19世紀	バナリ焼	無し	湧田・壺屋陶器や八重山 陶器が出土	近世の廃村や 現村落	新城島	晩期(多・三)、 第四期(早・當)、 ステージⅣ(國)、 川平貝塚文化(高)

石垣市史の編年(石垣市総務部市史編集課2007)を参考

図 1 3 「石垣市史の編年」(出典:石垣市総務部市史編集課 2007) [\(本文へ\)](#)、[\(本文 2 へ\)](#)

例として、石垣島の名蔵湾付近



図 1 4 「名蔵アンパル」 [\(本文へ\)](#)



図 1 5 「下田原期の遺跡分布」 (出典：石垣市史考古ビジュアル版 第 2 巻) [\(本文へ\)](#)



図 1 6 「ピュウツタ遺跡出土の下田原式土器復元資料」(出典: 石垣市教育委員会 1997) ([本文へ](#))

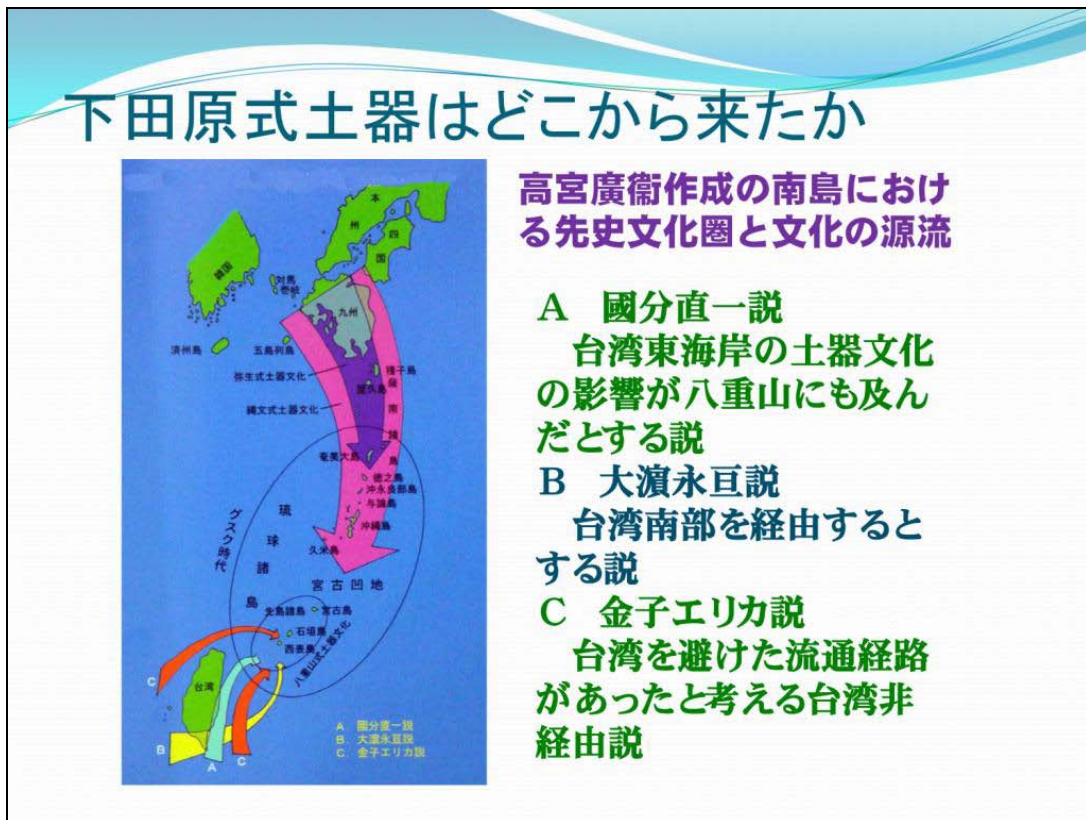


図 1 7 「南島における先史文化圏と文化の源流」(出典: 高宮廣衛 2001) ([本文へ](#))

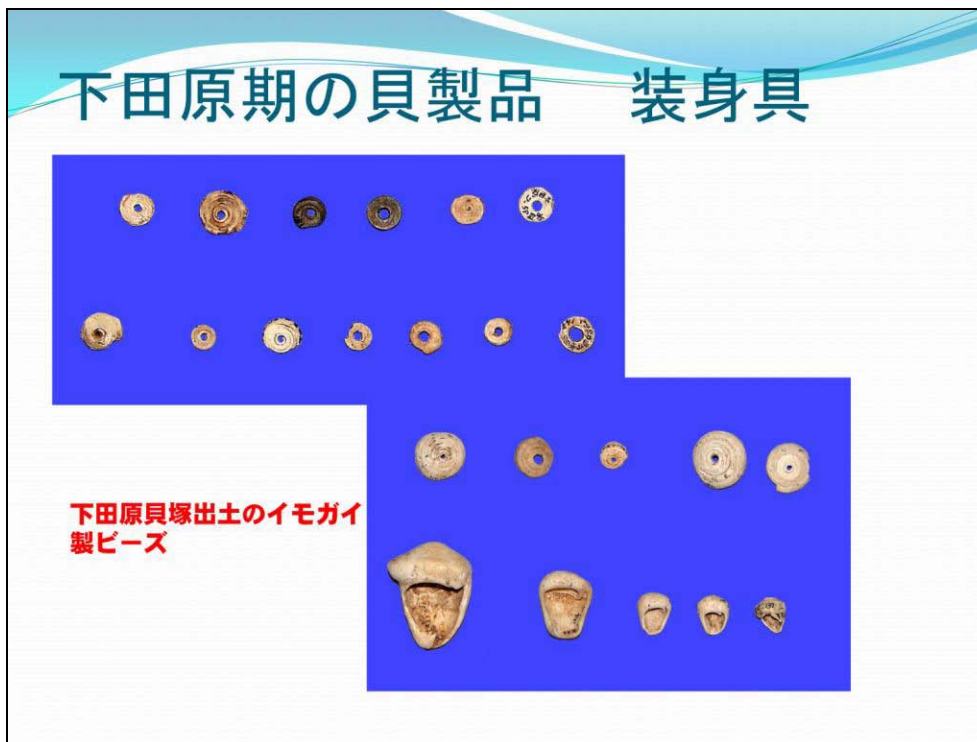


図 1 8 「下田原期の貝製品 装身具」(出典：沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵) [\(本文へ\)](#)

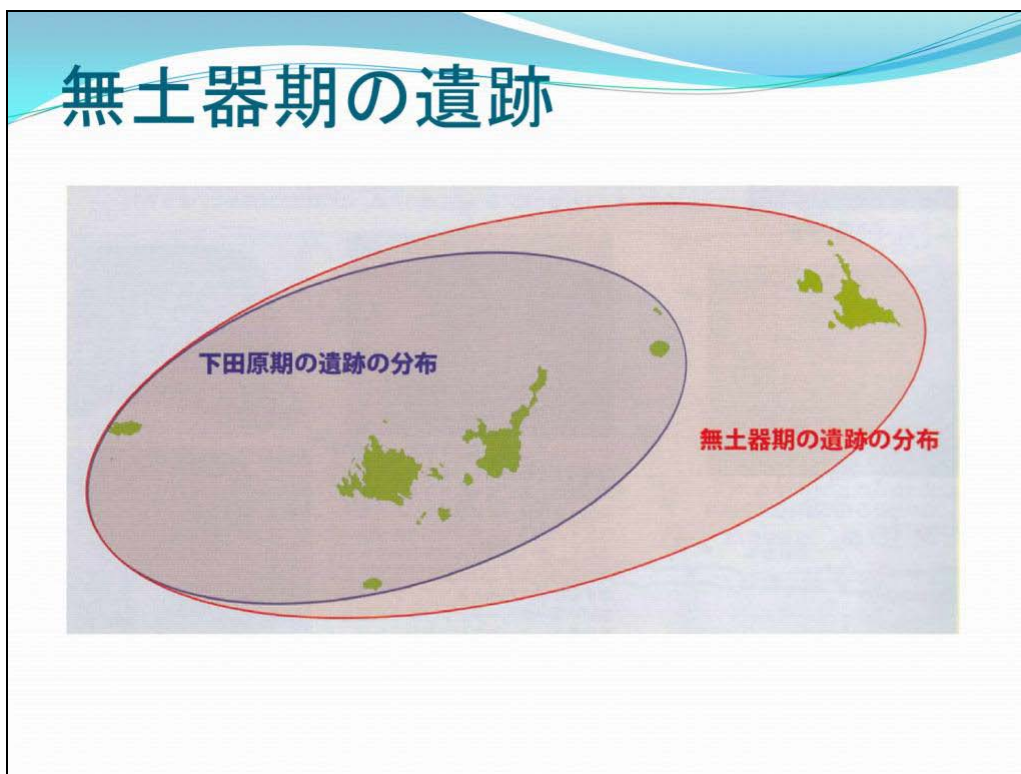


図 1 9 「下田原期の遺跡と無土器期の遺跡の分布範囲」

(出典：石垣市史考古ビジュアル版第 3 巻) [\(本文へ\)](#)

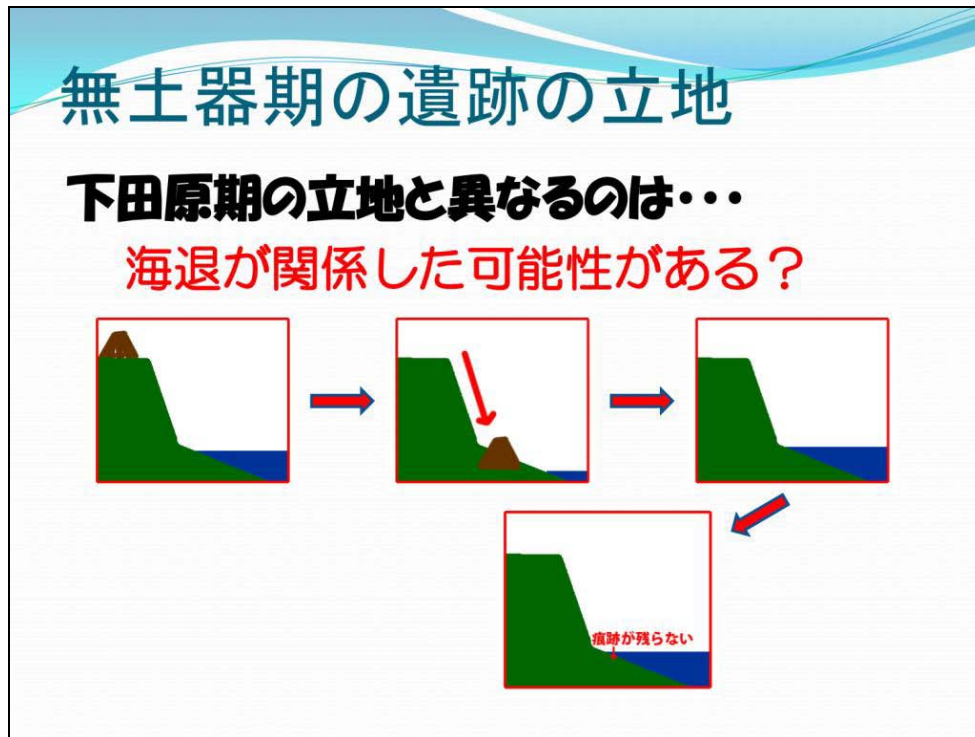


図 2 0 「無土器期の遺跡の立地」[\(本文へ\)](#)

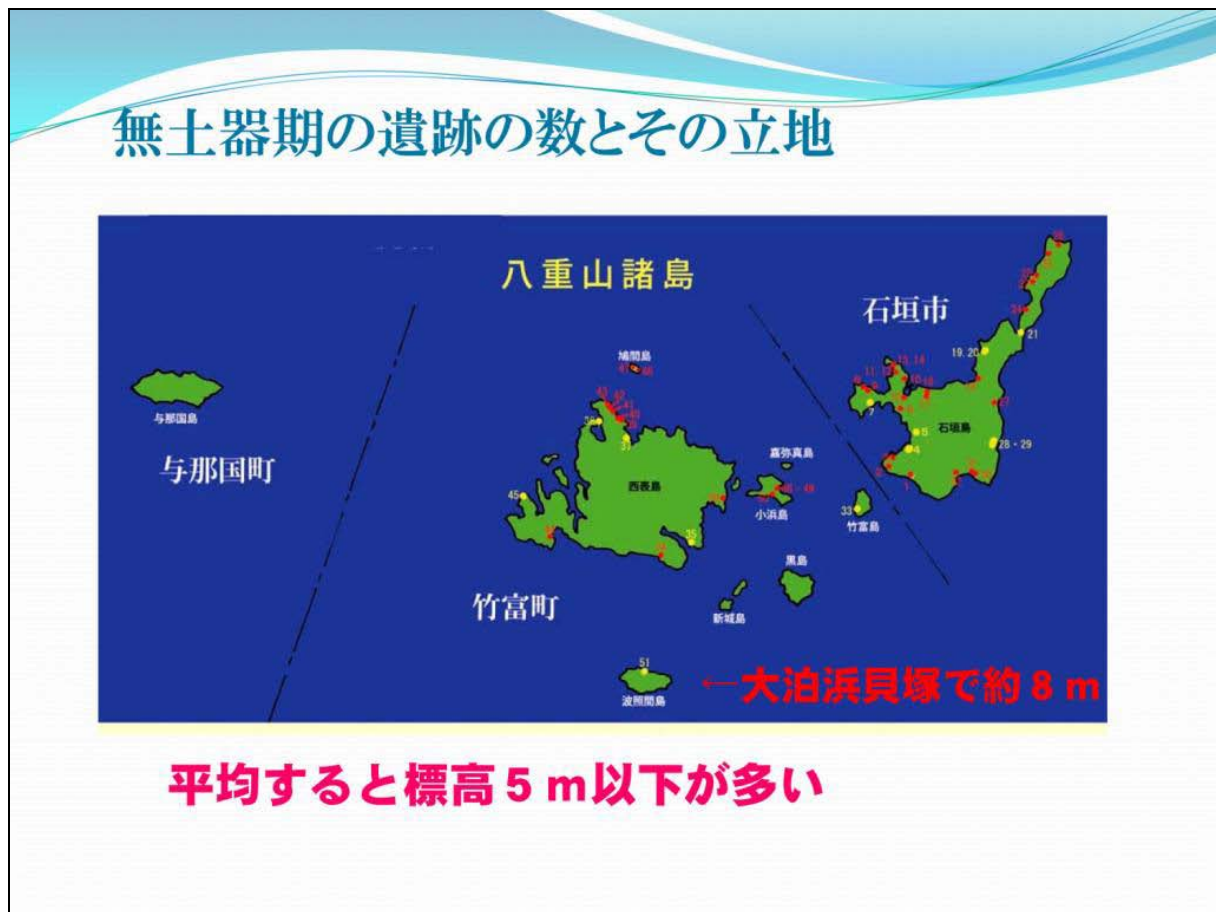


図 2 1 「無土器期の遺跡の数とその立地」

(出典：石垣市史考古ビジュアル版第 3 巻) [\(本文へ\)](#)



図 2 2 「石斧の比較」(出典：石垣市史考古ビジュアル版第 3 巻) [\(本文へ\)](#)

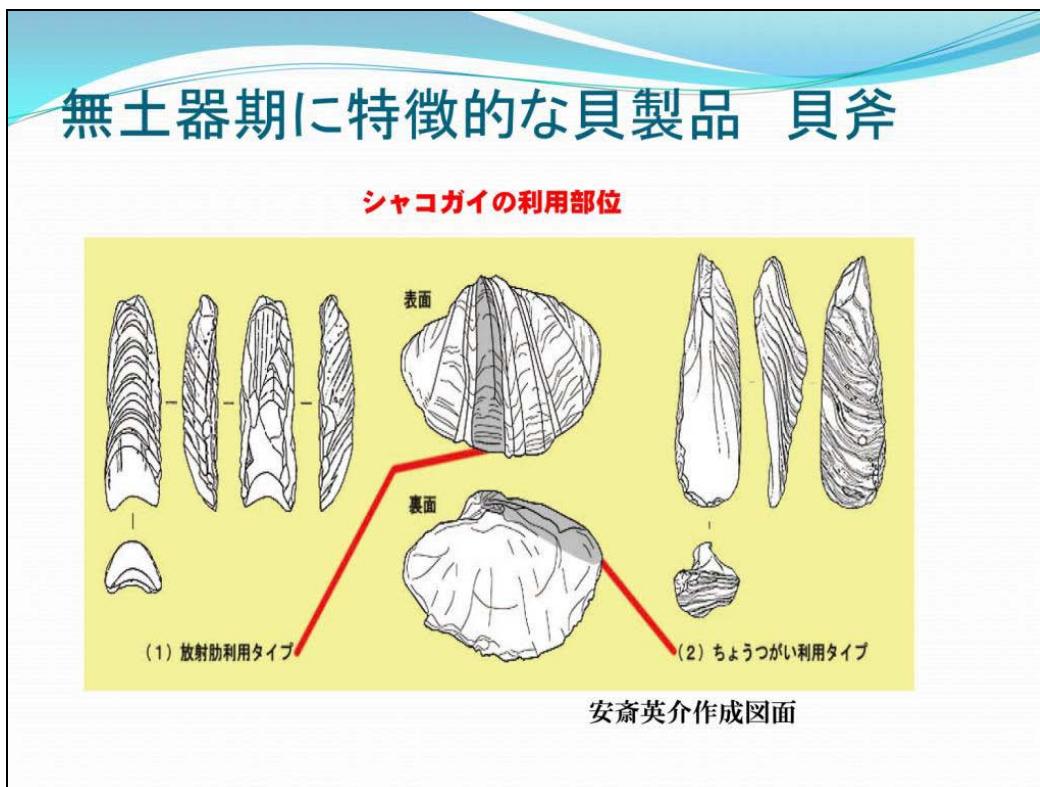


図 2 3 「無土器期に特徴的な貝製品 貝斧」(出典：安齋英介作成図面) [\(本文へ\)](#)



図 2 4 「石垣島崎枝赤崎貝塚出土のシェルディスク」

(出典：石垣市教育委員会所蔵) [\(本文へ\)](#)

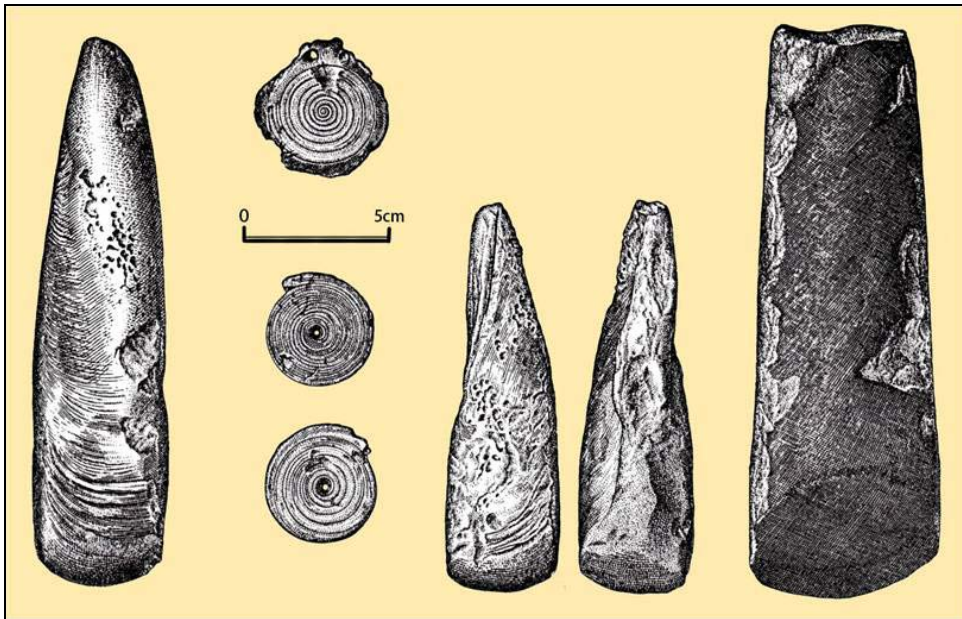


図 2 5 「フィリピンパラワン島ドゥヨン洞穴出土遺物」

(出典：Robert B. Fox 1970) [\(本文へ\)](#)



図 2 6 「無土器期の終わりに搬入された遺物」

(出典：沖縄県立埋蔵文化財センター) [\(本文へ\)](#)

編 年	遺 跡 名	遺 物
第一期	仲 間 第 一 (西 表)	<u>石器 (磨製・半磨製)</u>
第二期	下 田 原 (波照間) 仲 間 第 二 (西 表) 大原川付近小貝塚 (西 表)	<u>土器 (小量)・石器</u> 貝器・骨角器
第三期	山 原 (石 垣) 平 西 (西 表) フルロウ山 (小 浜) フルスト原 (石 垣) 波 照 間 貝 塚 群	<u>土器 (外耳多量・磁器</u> <u>その他)</u> 鉄製品・ <u>石器</u> ・貝器・ 骨角器
第四期	大 原 (西 表) 野 底 (") 川 平 第 一 (石 垣) 川 平 第 二 (") 川 平 第 三 (") 名 蔵 川 (") 黒 島	<u>土器 (ハナレ系?・磁器</u> <u>その他)</u> 鉄製品

——線は各遺跡に共通するもの

図 2 7 「早稲田編年」 (出典：滝口宏 1960) [\(本文へ\)](#)



図 2 8 「地層累重の法則」[\(本文へ\)](#)

コメントと討論

司会：

上野 祥史（国立歴史民俗博物館 考古研究系 准教授）

コメンテーター：

小熊 誠（神奈川大学教授）

真栄平房昭（神戸女学院大学教授）

パネラー：

ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

得能 壽美（法政大学沖縄文化研究所所員）

島袋 綾野（沖縄考古学会会員）

松尾 恒一（国立歴史民俗博物館 民俗研究系 教授）

（上野） それでは、これまでの先生方の講演を受けて、総合討論の方に入ってまいりたいと思います。私は総合討論の方の司会を務める、国立歴史民俗博物館の上野祥史と申します。

まず4先生方の発表を受けまして、コメントをお二方の先生からいただきたいと思います。まず、お一人目として神奈川大学の小熊誠先生よりコメントをいただきたいと思います。

コメント1：小熊 誠（神奈川大学教授）

神奈川大学の歴史民俗資料学研究科で民俗学を教えている小熊と申します。実は私は前任校が沖縄国際大学という沖縄の大学で、20年以上民俗学を教えていました。そういう関係でこちらに登壇させていただいているわけです。

クライナー先生から島袋さんまで5000年以上の長い時代の話をごどのようにまとめるか。そして、奄美から八重山までの長い距離、これだけの距離は大阪から行くとどのぐらいになるのでしょうか。ちょっと見ると、東京なんかとつくに越えて仙台ぐらいまで行ってしまいかもしれませんね。逆に大阪から南の方を考えると、大阪から奄美、奄美から八重山はほぼ同じぐらいではないでしょうか。このぐらい長い距離と長い時間について、どうや

ってコメントしたらいいのか非常に頭を悩ませているところですが、私は幸い民俗学といういい加減な学問を専攻しています。時代も地域も飛び越えていろいろなことを考えたり、発言したりしても許されるような学問をやっておりますので、そういう意味で広い範囲でコメントさせていただきたいと思います。

まず、皆さまの常識を覆すところから始めたいと思います。どういうことかといいますと、現在の基本は、八重山も含めて沖縄県です。これは日本の一部です。これが一つの常識です。しかし、ご存知のように日本復帰前、つい最近まで沖縄県は米軍統治下にあって日本ではありませんでしたし、つい120年ぐらい前、明治より前は琉球王国という日本とは全く別の国でしたし、先ほどの先史の時代になればどうなるかわからない、日本とどういう関係になるのか分からないというようなことです。もう一つ、奄美は現在鹿児島県ですが、こういう常識も取り外して考えないといけません。つまり、鹿児島県の奄美と沖縄県とどういう関係があるのか、似ているのか似ていないのかということも考えなければならぬのです。

印象論で言いますと、奄美に行きますと、元ちとせという歌手がいます。彼女の歌を聞いたことがあるかと思います。石垣の方に行くと、島袋さんに似ているような夏川りみさんという歌手がいます。二人とも多分紅白歌合戦に出たことがあると思いますが、どうでしょうか。歌を覚えていらっしゃるでしょうか。両方とも南の女性、南の雰囲気という似たところもあるけれども、歌を聞いてみると全然違います。歌の歌い方が全然違います。つまり、似ているところもあれば違うところもあるのです。これは簡単なことなのですが、なぜそういう文化の似たところと違うところがあるのかということのを少し考えていきたいと思います。私は非常にマクロな視点でコメントをし、多分、真栄平先生はもう少し近世の交易という比較的ミクロな視点でのコメントになるのではないかと思います。

時間軸に沿って、島袋さんに対するコメントをさせていただきたいと思います。先史学についても全く私は素人です。これも今度は常識の確認ですが、先史、つまり歴史の前というのは何を意味しているのかといいますと、一つは文字がない時代ということです。もう一つ重要なことは、国家がない、国がないということです。だから、当時のことは、国家を外して考えなければなりません。

もう一つ大事なことは、これは本当かどうか分かりませんが、先史というのは農耕時代ではないのです。農業を始めていないのです。狩猟採集が基本の時代です。われわれはどうしても、農業があって、文字の記録があって、その文字の記録には農民が虐げられて苦

しい生活をしていたというような記録ばかりが出てくるようなイメージを持っているかもしれません。それを外してしまわないと、先史の時代は分からないのです。

ポイントは、有土器（土器がある）時代から無土器（土器がない）時代に逆行しているように思えるのはなぜかということなのですが、島袋さんは考古学専攻の人ですからはっきり断定はされませんでしたけれども、一つその間に断絶があるということです。断絶があるということはどういうことかということ、後から人がやってきているということです。では、どこから人がやってきているのか。別の文化を持った人がやってきているのです。つまり、土器を使わなくても生活できた人々がやってきているということです。

その特徴は貝製品だということを言いました。これは台湾、フィリピン、オセアニアという南の方との関係を示唆しています。もう一つは石焼きです。つまり、海のものを採って、石を焼いて調理をする。蒸し焼きにもできるでしょうし、多分おいしかったと思います。そういう文化を持った人たちがいたということです。その時代に八重山には、北ではなく南との関係で、南の人たちがやってきたわけです。

なぜこんなことができるのか。これはちょっと説明がなかったと思うのですが、石垣辺りまでは島が点々と続いています。後で地図で確認してください。台湾を越してフィリピンまで小さな島がずっとあるのです。ということは、小さなカヌーみたいな船で人々が行ったり来たりできたのです。だから、人が南から八重山に来ることができたのではないかと十分考えることができます。では、北はどうなのか。北は九州から沖縄本島まで同じように島伝いに小さな船で行くことができるだけ島がずっと並んでいますが、沖縄本島から宮古島までは300kmあります。この300kmの間に何も島はありませんので、小さな船ではなかなか行けません。だから北の琉球文化圏と南の琉球文化圏は分かれていて、南の八重山の考古は、北とまた違った独特な文化を持っていたということが言えると思うのです。

一つ言えることとして、人の移動ということが考えられます。その人たちは、われわれの農業とは異なる狩猟採集ですが、豊かな環境で豊かな生活をしていたのではないかと。しかも面白いのは、平安時代までこうやって暮らしていたということです。平安時代というと、奈良を超えて平安ですから、日本の歴史からいったら国家がしっかりできている時代です。そのときに、琉球列島には国がなかったのです。そういう生活をしていたのです。搾取もされずに人々が豊かに暮らしていたのではないかと想像してしまうわけです。

その後、日本本土は平安末から変わっていき、日本でいうと中世に入っていくわけです。

けれども、そのあたりになると東シナ海の交易がすごく盛んになってきて、倭寇というものが出てくるのです。それを落ち着かせる明という国が14世紀に出ます。このときに李朝朝鮮ができ、沖縄も統一王朝の第一尚氏が15世紀初めにできます。明という大きな国を中心とした東アジアの時代の変化があり、その中に琉球ができてきます。そうしますと、琉球の国は八重山を統一し、奄美も統一していきます。

そういう中で奄美から八重山に至るまで、その時代以降にかなり基盤が似たような文化が成立して、先ほどのノロ制度も出てきます。それから、発表者のお話に出ませんでしたけれども、いわゆる日本の中世の時代、奄美から八重山までの地域には亡くなった人の骨を洗って葬るという洗骨など、われわれ日本本土の文化とは違う共通の文化がありました。その基盤がいまだにあります。奄美は1609年に薩摩に攻められてから、薩摩に併合されてしまいましたから、そこから薩摩の領域になって琉球から分かれるわけですが、この400年の歴史を経ても、奄美と沖縄は共通する文化を持ったまま現在に至っているわけです。そういう中で、クライナー先生は昭和30年代に詳しい調査をなさいました。これは民俗学の中では金字塔に当たる、一つの地域、神観念等から日本文化の大きなところまでを見通そうとした研究だったのです。

最後に一言だけ申し上げますと、柳田国男と岡正雄という話がございました。柳田国男も、沖縄・奄美を含めて南の島々を日本の文化の中でどう考えようかということを一生涯懸命やった人です。柳田国男はやはりどうしても日本という国の中で、日本文化の中でとらえようとしていました。一方、岡正雄さんもちろん日本文化が基本なのですが、もっと南の島、あるいは中国、あるいは北の方などいろいろなところから人と文化がやってきて日本の文化ができてくるのだという大きな発想で考えられた人です。その辺の考え方の違いが柳田国男と岡正雄の学問的な分裂を生んだといわれていますけれども、それを乗り越えて、われわれに今、南の島々をどう考えていくかということを示唆してくれているわけです。

そこには海と人の交流の関係があります。今日では海洋です。海というものは人を隔てるだけではなくて、実はさまざまな文化をつないできたものなのです。そこに、人・モノ・文化の交流が古い時代から今に至るまでずっとあるわけです。現在の日本文化の多様性ということ、この辺から考えていくことができるのではないのでしょうか。

(上野) 小熊先生、ありがとうございました。続きまして、真栄平先生、よろしくお願いいたします。

コメント2：真栄平 房昭（神戸女学院大学教授）

私の専門領域は日本の近世・江戸時代です。江戸時代での琉球はどういう位置づけかといえますと、幕藩体制が近世に成立して、薩摩藩を通じて琉球にもさまざまな幕藩体制の政策が及んできます。そういう日本と琉球との関係を基本的に考えるというのが近世琉球史研究のテーマですが、もう一方で、琉球は幕藩体制の外にあるという性格も併せて持っています。中世以来の朝貢貿易を通じて中国と交流があり、さまざまなものが海を越えて琉球にもたらされます。これもまた近世の琉球を考える重要なテーマです。ですから近世は、日本との関係、中国との関係の両面を問題にするのですけれども、今日の話は非常に古い先史時代から話が展開して近世のところまで行ったわけです。私はお二人のご報告を伺った中で、特に印象深かったところから感想を申し述べたいと思います。

まず、島袋さんの報告で特に印象深いと私が思ったのは、歴史の中で災害が起こった場合、その地域が大きな打撃を受けて村全体がなくなってしまう可能性があるということです。思い浮かべるのはやはり今年東北沿岸を襲った大津波ですけれども、大津波によってテレビの映像で映し出されているように延々たる廃墟が続いています。昨日までそこに町があった、村があったはずなのですけれども、そこが壊滅的になっているという、瓦礫の状況です。

先史時代はどうだったかと考えますと、やはり大津波で何も残らないという状況があり得たのではないかと。文字がないので津波があったということは記録では分かりませんが、発掘調査でそれが解明される可能性があります。そこに非常に興味を覚えたわけです。先ほど下田原期という時代の説明の中で、下田原期とそれに続く無土器の時代との間に約2000年間、未発見の空白期があるのだという指摘がありました。この空白期はどうして生じたのか。一つには、巨大な津波がこの沿岸を襲ってあらゆる歴史の痕跡を流し去ってしまったという可能性が考えられると思います。まだきちんと確立した意見ではないかもしれませんが、津波の痕跡が指摘されているのです。

こういう空白を生み出す要因として、普段は静かな海が時に牙をむいて大津波で歴史を飲み込んでしまうということが、歴史上繰り返されてきた可能性があります。私が専門としている近世でも、1771年にマグニチュード7以上の巨大地震が八重山諸島の近海で起こりました。その結果、かなりの集落がダメージを受けているのです。幸いその時代は記録

が残る時代でしたから、大津波が起こったという状況を報告した公文書が確認されています。それによって、大体どれくらいの人が亡くなったか、流された牛や馬、それから船の数といったものが具体的に分かります。

そうしますと、宮古・八重山で18世紀後半の明和の大津波と呼ばれる津波で1万人を超える人が亡くなっているのです。その数は大正年間に至るまで人口が回復できないほどの深いダメージを島社会に与えているのです。そういう状況をふまえて考えると、先史時代の海底地震による津波の影響は、未発見の空白期2000年間を解き明かす一つの視点だろうと強く思った次第です。これが第1点目です。

第2点目の感想は、琉球・沖縄史を考えると、日本列島の一番最南端にあるということなので、南との文化的なつながりを意識します。これは当然だと思います。気候的にも亜熱帯地方ですから。台湾、フィリピン、あるいは中国南部が想定されますが、近世の九州の平戸に南蛮人がやってきた時代の記録もあります。それはスペイン人ですが、アビラ・ヒロンという商人が書き残した記録です。その商人は船でずっと九州を南下して、南九州の鹿児島から沖縄を経て台湾経由でフィリピンまで往来していた人です。その記録を見ますと、南九州をずっと沿岸伝いに南下して、鹿児島からフィリピンまで、夜は陸上のどこかの島に立ち寄り、昼はずっと航海を続ければ難なく行けるのだと書いてあるわけです。つまり、海上交通の発達した時代になると、フィリピン、沖縄、南九州という航路がかなり安定的に確立されていたわけです。

外からの影響を文化的に受けることについて、今日のお話では、シャコ貝製の斧を持つ文化が八重山にあったことはフィリピンやオセアニアなど南方とのつながりの中で考えなければならないという指摘がありました。それを強く印象づけられたわけです。つまり、日本という枠を外してもっと南の世界とのつながりを想定しなければならないということです。

時代を一気に下って中世の話になりますが、琉球を大阪との関係で見ますと、16世紀に大阪の堺の商人が盛んに琉球へ渡航しています。これは『島津家文書』という記録に出てくる事実ですが、大阪の堺の商人は何のために琉球まで行ったかということ、南方産の物資を手に入れるためなのです。胡椒や象牙、香料のたぐいです。そのころの琉球は、得能さんのスクリーンに出された地図（[図8（29ページ参照）](#)）にもありましたように、アジアの各地と交易ネットワークを広げていた時代です。東南アジア諸国とも交易活動をしており、南方産の物資が琉球の那覇に集まってきます。それを目当てに大阪の堺、あるい

は北部九州から博多商人が渡航するといった状況でした。

このことがどういう意味を持つか。ものが単に動いているというだけではなくて、それがどのように使われたかという近世の得能さんの話にかかわってきますが、堺商人は香料を手に入れて、お線香の原料にもしていたと思います。堺はご承知のように、日本でも有数の古いお線香を生産した場所として知られています。お線香は南方産のインド産や東南アジア産の香料を混ぜて燃やしますから、その原料を国産でまかなうわけにはいきません。そういう香りのある香木を求めて南下していく商人の動きがありました。それが、琉球の東南アジア貿易と堺の貿易活動がリンクする一つの視点だったのではないかと思います。

そのような交易を通じて多様なものが流通する意味を探っていきますと、今日の二つ目のご報告の得能さんのお話の中で、多様な村社会レベルでそれらをどのように受け止めて考えるかという非常に興味深い視点が出されていたと思います。中世の琉球は中継貿易でものの流れが内部でどんなふうに使われたかがよく見えない時代なのです。これは資料的制約もあって見えにくいわけですが、近世になりますと外来のものや技術が受け入れられます。それがどのように内部で活用されていくか、技術を使って自らの力でものづくりをしていくのかということも資料的に検証できるようになります。その資料は北京でずっとストックされていた公文書で、北京の中国第一歴史档案館というところで、10年ほど前から続々と公開されるようになってきた資料です。

その資料を見ますと、18世紀から19世紀にかけてさまざまな中国製の輸入品が入ってきます。例えば、得能さんのご報告の中に中国製の竹製品が7万個入ってくるというお話がありました。これもまた具体的なデータなのです。つまり、従来の貿易観は、ぜいたく品が交易されるというもので、朝貢貿易は領主にとっての奢侈品を受け入れていたという理解でしたけれども、近世になるとそうではなくて、琉球の内部社会において需要の高い民具の類、竹製品や、もちろん薬もありますが、そういったものを琉球が受け入れて交易をしていたのだということがデータからわかるのです。そうしますと、この交易の意味は、単に支配層のための特殊な交易ではなくて、社会全体のニーズ、需要に合わせた形のものが輸入されているというように理解が変わってくると思います。ものを通じて見えてくる日常性の歴史といえますか。日々の暮らしの中で消費されるものには、例えばほかにもお茶があります。中国茶がかなり琉球に輸入されています。それを琉球で国産化しようという動きもあります。土質など、なかなかうまく気候が合わないところもあって、成功したとは言いがたいですが、お茶の輸入と国産化が一部で行われるわけです。それから、

日本の茶も琉球に入ってきて琉球の中で国産化されていくということが行われます。

三つ目が紙です。紙もごくありふれたものと考えられがちですがけれども、日本の紙の技術が琉球に外来技術として海を越えて伝わってきます。もう一方で中国の唐紙の製法、作り方が琉球に入ってきます。この和漢、日中間の技術が琉球でブレンドされて新しい紙作りの技術が行われるという展開も遂げていきます。ですから、外から入ってくる文化的要素を中がどうやって受容し、内在化していくか。これは今日の得能さんのご報告の中で多くの貴重な示唆を与えてくれたものと私は強く印象づけられました。

総合討論

(上野) ここまででいろいろな報告、コメントが出てきたわけなのですが、もう一度、報告題と時間、空間を振り返ってみたいと思います。

今回の発表は、古い時代から言うと、まず先史時代を対象にされた島袋先生のご発表がありました。これは琉球弧と呼ばれる、列島の中でも特に南の八重山に焦点を絞った発表であったかと思います。その後、真栄平先生と小熊先生の補足でもいただきましたように航海時代、特に東南アジアや日本、あるいは朝鮮半島、中国とをつなげる大交易を行っていた時代としての琉球の時代があるということでした。今回はその時代のご発表はなかったわけなのですが、その後を受けて、日本では江戸時代だった近世の八重山諸島に注目をされた得能先生のご報告があったということになるかと思います。そしてもっと時代が下がって近現代ということになりますが、松尾先生とクライナー先生の報告提起ということになるわけです。松尾先生の方は八重山の龍船や農耕儀礼を取り上げてご報告をされました。クライナー先生は今までの先生方のご報告とは違い、沖縄本島より北の奄美を中心にお話をされました。

琉球弧をどう見るのかということを少しお話ししてみたいと思います。冒頭で機構長のごあいさつにもありましたように、琉球・沖縄という視点が民俗学や歴史学、人文諸科学の研究を大きく牽引してきました。これが少し前の時代のことです。つまり、琉球からアジアあるいは日本を見るということがこの時代の視点だったと思います。10年前、20年前ということになりますでしょうか、これが一定の成果を見て、共通の認識になってきました。つまり、日本にも属さない、中国にも属さない、あるいは独自の存在としての琉球王国という存在が定見化してくるわけです。どの世界にも属するし、どの世界にも属さない境界の世界であった、マージナルな世界であったという認識が出てきたのです。

この認識がやがて、「では、琉球とは一体何ぞや」という新しい問いを生み出しました。琉球が一枚岩ではないということも得能先生からお話があったかと思いますが、小熊先生からは、われわれが常識として持っている沖縄、琉球弧という観念を少し外して見てみましょうよというお話があったかと思います。今回は歴史学や民俗学、あるいは考古学の視点から、八重山や奄美、沖縄ということで特定の地域に絞らずに、より広い報告が集められたのではないかと思います。

今回は中世の大航海時代、交易を行っていた時代が抜けていますが、いずれの方々の報告でも注目されたのは日常生活であったということがその答えになると思います。真栄平先生のコメントにもあった生業、あるいは松尾先生やクライナー先生の信仰や儀礼といったものと、政治的な関係を報告にするのではなく、日常生活との関係の中で琉球を見ていこうと考えた結果、このような構成になったのではないかと思います。

そこで、発表された先生方に少しお話をしていきたいと思います。私の方から二つ、三つほどキーワードを提示してみたいと思います。今の流れを受けて、「琉球がどのようなものかということを見てみましょう。一枚岩ではないですね」という話と関係して、一つ目のキーワードとしては、「外の世界とのつながり」ということになるかと思います。真栄平先生の方から、外在的なものをいかに内側に取り込んでいくのかというお話がありました。これはゆくゆくは時代を変えていく変化の要因、あるいは時代を終わらせる一つの要因にもなったかと思うのですが、外とのチャンネルを一つのキーワードとして挙げてみたいと思います。

もう一つのキーワードは多様性です。今回は琉球弧全体を総括するお話ではありませんでした。報告題としては八重山に話題が集中しましたが、琉球弧全体の中にはいろいろな世界があったわけで、その多様性はどう見えてくるのかというあたりの話です。特に、琉球弧内部の相互の関係性がどうであるのか。より細かいところに焦点を絞れば、得能先生のご報告にあったような、先島の中での相互交流というような話になったかと思います。

今あげた、外とのチャンネル、変化の要因、あるいは多様性といったところで、それぞれ先生方に今回お話しいただいた内容の補足、あるいはコメント等々をいただければと思います。松尾先生からよろしくお願いします。

(松尾) 私自身は民俗に対する関心に出発点があり、現代に伝承されている事象について研究を進めています。現代のわれわれが、現在につながる歴史をどのように受けとめ、考えるかといったことが、私の課題です。

これは私の特別な考えではなく、多くの民俗を主たる対象とする研究者に共有されている基本的な出発点かと思いますが、この10年ほどの傾向として、現代・現在に力点が置かれる一方、記録によってしかわからない遠い過去はさておき、記憶や経験をしてきた直近の過去についても、あまり大切にされなくなっているような傾向があるように感じています。

今回のシンポジウムは、琉球域の地域性を、歴史、民俗、考古、それぞれの研究成果から考え直すことによって見えてくるものがあるのではないかといった仮定のもとに、企画したものです。各先生のご講演とご報告、小熊先生、真栄平先生のコメントもいただいて、時間的にも空間的にも、ミクロ・マクロ、両方の視点が欠かせないことを実感しました。

生活と深くかかわって生み出され、継続してきた諸文化が、生活の近代化のなかで、あるいは戦争や災害などにより、その多くが断絶する一方で、再生される文化もあり、そこには、現代にそれぞれの地域で生きる人々にとっての意義があります。

今日上映しました二つの映像は、いかにも沖縄風の伝統行事を先祖代々受け継いできた行事のように見えますが、一つのほうの集落、干立においては、住人の8割以上は内地からの移住者で、彼らが集落の伝統行事を継承して行っているものです。すなわち、彼らにとっては、父祖以来受け継いできた行事ではないわけですが、彼らがその場所で暮らしてゆくこと、出身地もさまざまな人々がともにその場所で生活してゆく上で、地域的なアイデンティティを共有する上で大きな役割を果たしています。

ご覧いただいた映像は舞踊も曲調も、いかにも沖縄風のものと感じられたかと思います。この節祭^{しちまつり}は、1991年に国の重要無形文化財の指定も受けていますが、現在これを受け継いでいるのは、本土から移り住んだ人たちなのです。

そのままにしておいたら過疎化し、限界集落化したかもしれない地域が、遠方からの移住者によって維持され、伝統的な文化が継承されているという現実を、当該地域から考えるばかりでなく、移住者個人や、移住者がもと住んでいた地域のことまで含めて考える必要があると思います。地域社会やその文化を考える上で、当該地域の調査、研究だけでは充分ではない、現代社会が直面している諸問題をあわせて考えてゆく必要が、現代の課題としてあるのです。

(クライナー) 今日の先生方のお話を振り返って考えますと、私の話も含めて、およそ九州から台湾に至るまで連なる列島にある文化を二つ考えていたと思います。一つは、基礎文化です。例えば松尾先生がお話をされましたし、あるいは島袋先生、私もそうです。柳田先生がおっしゃるのは、文字を持っていない民衆、常民の文化です。もう一つは、特に得能先生、あるいは真栄平先生のコメントにあった王朝文化、一つの国家の文化です。

その場合に問題になるのは境です。琉球王朝の国の境は大体はつきりします。南はオヤケ赤蜂の乱以降の八重山です。北の方はどうも奄美大島を編入するのに少し時間がかかる

のです。恐らくもっと北にある鎌倉、室町幕府のことを考えに入れながら、非常に気を付けながらそこに侵入したのだろうと思います。これははっきりするのですが、南西諸島の基礎文化は一体、北の方はどこまで見ることができるのか。特に鹿児島の小野重朗先生、あるいは下野敏見先生、向山勝貞先生、いろいろな先生方がその境目がどこにあるのか考えていらしたのです。特に下野先生は物質文化、モノの文化です。得能先生が例を引いた丸い箕はどこまで使われていたのか。あるいは私が気にしていたのはイモを掘る道具です。トカラ列島まではもちろんですが、その北の方はどこまでか。あるいは今日、私が引用したのは薩摩半島の仮面行事です。これは向山先生の指摘があったのですが、なかなかそこははっきりした境目を見ることができないのではないかと思います。だから、「やまとんちゅ」の文化と「うちなんちゅ」の文化は、どうもそのあたりは入り乱れて中間地帯があるのではないかと思います。そこはこれからもっと研究を進める必要があるのではないかと考えています。

（得能） 外とのつながりについて言えば、いろいろな局面、いろいろな時代で起こって、いろいろな影響を受けて、逆に言うと自分たちも外に対していろいろな影響を与えているという、両方があっていいのだろうとは思いますが。そういう変化もあって、多様性といいますと、変化して多様性ができるのか、もともと変化しなくても多様性があるのかというようなこともあるのではないかと思います。それは地形や気候などのために、そうせざるを得ないという部分も当然あるわけです。

私がやっている近世で言いますと、先ほども言いましたように南との関係が断絶的になります。江戸時代まで台湾、中国と八重山の日常的な関係があったかという、それは全くなくなるわけです。南の文化も、北の文化も、西側にある文化も全部、大筋としては首里経由というか、沖縄本島経由という形で入ってきます。それをかき分けていって、八重山独自の文化というものはどこにあるのかということまでいくのもなかなか大変だろうなとは思っていますので、もともと変わっていなくても存在する多様性というのも難しいかと思っています。

近世の歴史研究だけに限って申しますと、琉球弧あるいは沖縄県という中で歴史資料を中心に研究するというならば、八重山というのは一番やりやすいところです。量的には本土の大和と比べて全然少ないのですが、琉球弧の中では比較的豊富に残っています。それから同じことと言うと、古琉球、中世の研究のためには近世からのアプローチ

がしやすいという感じはしていると思います。

もう一つ言うと、1609年から400年を経ているいろいろなイベントもありましたが、当然ながら琉球弧の研究はなぜかどこでも大学などの主導型になるのですが、沖縄本島が研究の中心であるということです。そういう意味で沖縄本島の歴史的な地域史研究はそれほど進んでいないというところがあります。首里・那覇の話で終わってしまうという格好です。民俗学の研究は割と進んでいるのですが、これも資料の制約があると思います。

もう一つは、どうしても贖罪的な発想がありまして、奄美研究の部分が足りなかったということです。鹿児島県の本土があまりやってくれないということもあって、奄美をどうするかと、ずっと奄美の方々は大変な思いをしてきたわけですが、実は同じような思いは八重山研究にもあります。先ほど言いましたように近世の八重山研究というものがあり、考古学もありますけれども、そういうものが琉球弧全体に響かないという感じがします。

最近、奄美の方とも私は仲良くしていて、沖縄本島抜きでしようかというような陰謀もたくらんでいます。「それは楽しいんじゃない」というようなことは言っています。ちょっと司会の方のご質問とは違いましたが、そういう意味では八重山という地域研究なのですが、大きく琉球弧というものに広げていって、奄美の方々とも共闘を組みつつ、新しい歴史像を作っていければいいなと思っているところです。

(島袋) 外とのつながりなどの部分で、先ほどの小熊先生の、島が続いているという指摘も含めてのお話です。私の恩師は高宮廣衛先生といいまして、沖縄の考古学ではとても有名な先生ですが、この先生と先島の先史文化についてお話ししたときに、どこから来たか分からない文化なのですが、いったん八重山に入ってきますと、本当に各島々をうまく利用して、石器の石材がない島は石材のある島に石を取りに行き行って石器を作るわけです。また、イノシシが生息していない島の人々は、小さなイノシシを捕って行って簡単な飼育をしているような痕跡も遺跡から見られます。ですから、そこにいったん入ってきた人々は、この島の特徴を利用しながら、この範囲でうまく生活を展開しているわけです。これは無土器の時期も下田原期の時期も一緒です。宮古諸島には石器に適する石材はないのですが、八重山諸島まで石を取りに来ていたようです。宮古諸島の遺跡から八重山諸島の石材が見つかります。また、イノシシも今、宮古では生息していませんが、イノシシの骨も見つかります。このように同じ文化を持つ人たちが、このエリアでとてもダイナミックに展開しているという印象を持っています。これは繰り返しになりますが、どこから来

たかはまだ分かっていない人々ですが、この地域をうまく利用して生活しているということです。

沖縄の考古学というお話からしますと、得能さんからの話もありましたが、「沖縄の考古学について話してください」と言われると私はとても困ってしまいます。どこからどう話したらいいのか。沖縄本島とも違う宮古・八重山をどう扱うのか、宮古・八重山と一緒に話していいのか、また奄美はどうしようと悩むわけです。私は沖縄考古学会というところに所属して、今日もこの肩書きで出ていますが、沖縄考古学会の中でも先島諸島が扱われるのはとてもまれです。また同時に、最近八重山諸島にいろいろな地域の方が考古学調査も含めて入ってきます。彼らは最初に漠然とした沖縄のイメージを持って八重山に入ってきて調査するので、地元の人と交流せずに帰ってしまった場合、後でレポートを読んで、なぜこんな調査をしたのかなと思うようなところもあります。それぐらい地域にはすごく多様性があり、それが基礎文化になっているのだとは思いますが、現在までそういったトラブルが見られるぐらい、いろいろな展開をしているのが琉球列島だと思います。

（上野） ありがとうございます。お時間の方もそろそろ予定の時刻になってまいりました。今回は琉球弧をどう見るかということで、いろいろな視点からのご報告やコメントをいただきました。この豊かな琉球弧の実体というものがやがてまたフィードバックして、日本をどう見ていくのか、あるいはアジアをどう見ていくのかという議論にもつながっていくのではないかと思います。それがまさに今回の企画を立上げた松尾先生が意図する「アジアから琉球弧を考える」ということで、アジアから琉球を見る、そしてまた琉球からアジアへという動きが今後期待される、展望できるのではないかと思います。

あいさつ

平川 南（国立歴史民俗博物館長）

今日は長時間にわたりまして、お付き合いいただきありがとうございます。課題としては大変大きく重い問題ですけれども、クライナーさんをはじめ、この問題を解いていくのには最適任の講師、そしてコメンテーターがそろい、十分皆さんに満足いただいたのではないかと思います。ただ、この問題は半日ぐらいの時間で議論つくせるような問題ではありませんので、これからもこの視点を大事に育てていきたいと思います。

私ども国立歴史民俗博物館は日本の歴史文化を、歴史、考古、民俗、そして自然科学を駆使して協業しながら一つ一つ解決を目指すという意味で設置された学術研究機関であり、その成果を一人でも多くの方に理解していただきたいという思いで、これまでさまざまな形で公開の場も設けてまいりました。ただ、残念ながら大阪、あるいは関西で歴博の研究成果を示す機会がなかなかなく、今回、大阪歴史博物館の全面的な協力を得てこのような催しをすることができましたことをうれしく思っております。これを第一歩としてこれからさらに何度も何度もおじゃまして、いろいろな角度から日本の歴史文化というものを見ていきたいと思います。

特に3月11日以降強く思うことですが、今日の報告の中でも基盤になっているのは、琉球弧の島々は豊かな自然、つまり自然という資源に恵まれているのですが、その一方で、台風に見舞われ、そして津波の被害を受けながら、その脅威の自然をとことん自分の体で体験し、その自然に対する畏敬の念が、琉球弧のさまざまな歴史と文化を生み出したと考えます。従ってこの視点を、これまで取り上げられなかった地域にスポットを当てて一つ一つ丹念に築き上げていくことで、本当の意味での日本の歴史文化を総合的に研究し、そしてわれわれの大きな地域社会の基盤に育てていけるのではないかと考えます。

千葉の佐倉は大阪から見たら遠い地かもしれませんが、原始古代から現代までトータルに日本の歴史文化を描いている国内唯一の博物館ですので、ぜひお越しいただきたいと思います。総合案内で私どもを指名していただければ、十分にご案内もできるかと思います。

本日はまことにありがとうございました。